
真説！リリカルボーボ 激闘！ハジケ大決戦！

sibugaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真説！リリカルボーボ 激闘！ハジケ大決戦！

【Nコード】

N0718W

【作者名】

sibugaki

【あらすじ】

ボーボ達が居なくなつた正にその時、突如として現れた『ネオ・マルハーゲ帝国』

彼等の前に人々は絶望に屈つしようとしていた。

だが、そんな彼等の前に数名の若者たちが立ち上がる。

これはそんな若者達の熱き、そしてハジケた戦いである！！！！

第1話 主人公が居なくても主役は居るぞコンチク賞！（前書き）

多くの読者様からの熱い声援により『真説』版も書いてみました
応援宜しくお願いします

第1話 主人公が居なくても主役は居るぞコンチク賞！

皆さんは覚えているだろうか？

そう、この小説『リリカルボーボ』の名が示す通り、ボーボ達のほかにもリリカルなメンバーが活躍する小説なのだ。

今回のこのお話はボーボ達が過去へ行った辺りの頃位（大体）から始まる。

なので是非かつもくしてもらいたい。

新暦・・・まあそんな辺りの頃。

此処ミッドチルダに突然現れた巨大帝国。

その名を『ネオ・マルハーゲ帝国』

彼等は突如時空管理局に、そしてミッドチルダ全域に牙を向いてきたのだ。

彼等は町の人々の健全な毛をぶち抜き、その抜いた頭の上にある事か『ザルそば』を乗せると言う残虐非道な行い。その名も『パゲそば』を実施していたのだ。

勿論これに管理局の魔道士達も抵抗をした。

だが、強大なネオ・マルハーゲ帝国の前に成す術もなかったのである。

人々が絶望に屈しそうになった正にその時、毛の真拳を受け継ぐ者が現れたのであった。
これはそんな勇気ある若者達の熱き戦いの物語である・・・ぽい

『新説！リリカルポーボボ 激闘！ハジケ大決戦！』

第1話 主人公が居なくても主役は居るぞコンチク賞！

時刻は昼時、街中を一人の少女が歩いていた。
オレンジ色のツインテールをした少女である。

「はぁ・・・ポーボボさん達が居なくなっと思ったたら、今度は一体何なのよ」

等と愚痴っているのはこの小説のヒロインであり過去に100校の制圧に成功したスケ番少女『ティアナ・ランスター』番長である。

「って、誰が番長だぁぁぁぁ！後滅茶苦茶な紹介すなぁ！」

天に向かって咆哮するティアナ。

そんなティアナを周囲の冷たい視線が襲い掛かる。

それに対し軽く咳払いしてティアナは再び歩き出す。

何故彼女がこうして歩いているのかと言うとそれには理由がある。

（はぁ、ネオ・マルハーゲ帝国とか言うのが出て来た途端六課の皆はバラバラになっちゃって、今皆何処で何してるのか音沙汰も無い状態・・・それに世界は混乱の真っ只中だし・・・この世界は一体どうなっちゃうの？）

ティアナの脳裏には不安で一杯であった。

そして、ふと別の方に視点を移して見ると其処には何かが居た。

「おいっちにいい、さんっしい」

「ごおっろっく、しっちはあっちい」

其処には何処かで見覚えのある左右で瞳の色が違うオッドアイの少女と一匹の『コアラ』が何故か街中でラジオ体操をしていたのであった。

「つて、ヴィヴィオオオオ！あんたそんなトコで何してんのよお！」

「え？・・・あ、田中さん！」

「誰が田中じゃあ！」

毎度の如きのボケにティアナが叫ぶ。

すると隣のコアラが額の汗を拭っていた。

どうやら終ったようである。

「ふう、これでパーフェクト達成。この31日間苦勞したよ」

と言つて体操カードに判子を押し。

「ね、ねえ・・・ヴィヴィオ・・・そのコアラ・・・誰？」

「ん？この人？さあ？」

「知らないで一緒に居たのぉ！」

毎度のことながらヴィヴィオの回答にティアナは目を見開いて叫ぶ。するとコアラがティアナを見る。

そして目をハートマークに変えた。

「え？何？その目！」

「惚れました！」

「はああ！」

いきなりの発言にティアナは叫ぶ。

しかもいきなり何処から出て来たのか巨大な木にしがみついている

のだ。

「さあお嬢さん。僕と一緒にこの木で暮らしましょう」

「嫌よ！私コアラじゃないし」

「チクシヨオオオオ！」

思いつきり振られたことにショックを受けたのかコアラがそのまま逃げ去っていく。

そんなコアラに向ってヴィヴィオが「待ってガ王ウウウウウウ！」と叫んだのであったりする。

（あのコアラ・・・ガ王って名前だったんだ・・・）

と、至極どうでも良い事を考えていた時であった。

「うわあああ！毛狩り隊だあああ！」

「え！？」

近くで人の叫び声が響いた。

それを聞いたティアナが向う。

其処には街行く人々を次々とパゲそば化にしていく毛狩り隊の姿が居たのであった。

「ヒヤツハア！毛狩りじゃあ！」

「ボーボボが居ない今は俺達の天下じゃあ！」

等と叫びながら毛狩り隊が次々に人々の毛を狩っていく。

「くっ、あいつら・・・クロスミラージュー！」

ティアナがデバイスを起動してバリアジャケットを纏う。

「あんた達良い加減にしなさい！クロスファイヤーシュートオオ！」

「グバアアアア！」

ティアナの放った魔砲を食らい毛狩り隊員達が吹き飛ぶ。

「おお、管理局の魔道士様だあ！」

「おら達を助けて下さいだあ！」

「此処何処県！？」

等とツツコミを入れるティアナ。

しかしそんな彼女の前に一人の男がやってきた。

「何やってるのお前等？天下のネオ・マルハーゲ帝国の隊員がこんな小娘程度に負けちゃって」

「す、すみません・・・ツラ様」

其処には一際強そうなアーマーを身につけた隊長の様な男が居た。

「俺はネオ・マルハーゲFブロック隊長のツラだ。部下が世話になったなあお嬢ちゃん。部下に代わって礼をさせて貰うぜ」

「いらぬわよ！それよりこの毛狩りを止めて貰えないかしら」

「それは無理だな。この世界の全ての人間の毛を狩りつくす事が俺達の使命なんぞなあ・・・ってな訳で、お嬢ちゃんの毛も狩らせて貰うぜえ！」

ツラが言い一気に迫る。

そんなツラに先ほどと同様に魔砲を放つ。

だが・・・

「俺をその辺の雑魚と一緒にするんじゃない！」

その魔砲を何とツラは片手で払い除けてしまったのだ。

「嘘っ！こいつ強い！」

「俺の強さに絶望したかい？じゃあ・・・お待ちかねの毛狩りタイムだぁ！」

ツラが言う。

すると彼の背中から無数のバインド糸が現れる。

その糸により完全に動きを封じられてしまったティアナ。

「嘘！何で毛狩り隊のあんたがバインドを使えるの？」

「カツカツカア！業に入っては業に従えって言葉があるだろう？俺達も使えるようになったんだよぉ！さてと・・・それじゃゆっくりとその綺麗な髪を狩らせて貰うぜえ」

下衆な笑みを浮かべながらツラが近づく。

必死にバインドを解こうにもかなりの強度の為に全く解ける気配がない。

「諦めな！ポーボボの居ないこの世界じゃ俺達の天下なんだよぉ！」

(くっ・・・もう、駄目・・・)

諦めて目を閉じた・・・まさにその時であった。

「ああ！あれは何だ！」

毛狩り隊員の一人が叫ぶ。

それを聞いてツラも上を見上げる。
其処は高層ビルの上に居た。
青い髪に翠の瞳をした少女・・・と、それを縛り上げて散々な拷問
の数々を施す野菜連合。

「次ピーマン食ったらこの程度じゃ済まさねえからな！」

野菜連合の2代目ヘッドであるダイコンが青髪の少女に対してそう
言い放ち、そのまま紐を切った。

「ううう・・・何でピーマン食べたら駄目なのお？あれ美味しいじ
ゃあん」

等と涙しながら落下する。
そして地面に激突した。

「あうちいー！」

その際激しい砂煙が舞い上がるのと同時に少女の叫び声が聞こえた。
だが、それよりも彼等は戦慄した。

「ま・・・まさか・・・お前・・・あの・・・」

「あんた・・・つたく、もつと速く来なさいよね」

隊員達は恐怖の目になり、ティアナはホツとする。

砂煙が止んだ場所・・・其処には誰もが待ち望んでいた存在。

青髪のハジケリストでありかの最強の真拳『鼻毛真拳』を継承した
少女。

「待たせたな・・・相棒」

するとその額に『ハジケ』の文字が刻まれる。
そしてスバルが発光してその発光が止んだ時、其処には一人の男が立っていた。
蒼いアフロにグラサンを掛けたその姿。
その姿は正しくあの男であった。

「なに！その姿は・・・まさか！『ボボボーボ・・・』」
「新説・鼻毛真拳奥義！『ハンカチに短し！鉢巻に長し！』」
「ぎいいいいやあああああああああああああああああああ！」

ボーボボ・・・基、スバルの放った鼻毛真拳の前にツラは会えなく撃沈した。
そして地面に降り立ったボーボボの変身が解け、元のスバルに戻った。

「久しぶりだねえ、ティア」
「スバル・・・馬鹿・・・勝手に何処か行ってるんじゃないわよ」

久しぶりの再会を喜ぶ二人。
だが、この再会がこれから起こりうる激闘の幕開けになるとはこの時二人は全く予想だにしていなかったのであったりしていた。

その頃、別のエリアでは・・・

「ま、不味い・・・あのツラ様がやられた！至急他の隊長達に報告しなければ」

「そうはさせないよお！」

「お前達の野望は！我等が打ち砕く！」
「何！」

隊員が声のした方向を見上げる。
其処には一人の少女と一匹のコアラが何故か浴衣姿で降下してきたのだ。

「はいいいい！一体何の儀式い！」

「隙あり！ガ王君！」

「承知！行くぞ」

「コアラ骨法」

「ハジケ殺人術」

「ぐべらびゃあああああああ！」

コアラの事が王のコアラ骨法、そしてヴィヴィオのハジケ殺人術の前に倒れる隊員。

その前に二人は雄雄しく立つ。

「あいつこそ鼻毛の力を受け継いだ少女か・・・確かに強い」

「そうだよ、スバルお姉ちゃんは強いよ。そして凄いハジケリストだよ」

「そうか・・・ならば、我等も共に行くでしょう・・・この世界を正す為に」

そう言ってガ王とヴィヴィオも密かにスバルとティアナの後についていくことになったのであったりした。

第1話 主人公が居なくても主役は居るぞコンチク賞！（後書き）

次回予告

スバル

「さあて、この調子で次のブロックも潰すぞお！」

ティアナ

「張り切ってるわねえあんた・・・って、今度の敵はかなりやばいみたいよ！」

スバル

「平気平気い・・・ん？あの人影は？」

ガ王

「次回、真説！リリカルポーボ

『ハジケたヒロイン登場！ウサ男・・・あたいを守ってくれ！』」

ティアナ

「バレバレだあ・・・」

第2話 ハジケたヒロイン登場！『ウサ男・・・あたいを守ってくれ！』（前巻）

前回のあらすじ

ボーボボ達が過去へ行っている間、ミッドチルダに突如として攻めて来たネオ・マルハーゲ帝国の手によりミッドチルダは崩壊の危機に瀕していた。

だが、そんな世界に毛の真拳を受け継いだ一人の少女と彼女を取り巻く若者達が立ち上がったのだ。

「・・・・・・・・・・」
『・・・・・・・・・・』

麻雀しながら・・・

ティアナ

「発想暗いよお！」

さて、そんな感じで今回も真説！リリカルボーボが始まるよお！

第2話 ハジケたヒロイン登場！『ウサ男・・・あたいを守ってくれ！』

第2話 ハジケたヒロイン登場！『ウサ男・・・あたいを守ってくれ！』

Fブロック隊長であるヅラを倒したスバルはティアナと共に街を歩いていた。

「それじゃ、あんたはこの数ヶ月間の間ずっと毛狩り隊と一人で戦ってたって言うの？」

「うん、そうだよ。ポーボさんから受け継いだこのハジケ変身と鼻毛真拳は無敵だからね」

（確かに・・・ああもいきなり変身したら誰だって驚くわねえ）

ティアナも内心余リスバルのハジケ変身は慣れてなかった。

と、言うのも目の前に入るのは弱冠15歳位の少女なのだ。それがハジケ変身をしただけで20代位の大男になってしまつた。から恐ろしい事である。

「それで、次は何処に向うの？」

「この調子で格ブロックを潰して最終的にはネオ・マルハーゲ帝国自体を潰すつもりだよ」

「それを・・・一人でやるつもり？」

「聞かねえでくれいセニヨリータ。男にはやらなきゃなんない戦いつてのがあるんだ」

何故か波止場の風景になり水夫服になつたスバルが荷物を片手に力ツコウつけて言うのであつた。

そんなスバルに相変わらずだなあと内心ホツとすると同時に呆れるティアナなのであつた。

「しょうがないわねえ・・・私も一緒に行つてあげるわよ」

「ええ！本当？」

「当たり前でしょ！あんたを一人で行かせる方が心配よ。大丈夫！私だつて少しは戦力になるでしょ？」

「戦力以上だよ！だつて・・・だつて・・・ツツコミが居なかつたらボケが成立しないもん」

「あたしやあはなからツツコミ当てかい！」

街行く人々の中でティアナの怒声が響き渡るのであつた。

此処はネオ・マルハーゲ帝国の隊長陣が集まっている会議室。
其処にはE、Bブロックの隊長陣が集まっていた。

「どう言う事だ！Gブロックは愚か、あのFブロックのツラまでが
やられたと言うのか？」

机をドンと叩いたのはEブロック隊長の『ラノベ』である。
名前の通り本そのものである。

「今まで倒されたのは雑魚基地だっただけにこれは由々しき事態だ」
と、冷静に言っているのはDブロック隊長の『バイオレンス』であ
る。

その名の通りバイオレンスな野郎である。

「んもう、乱暴なお嬢さんねえん。私達ネオ・マルハーゲ帝国に逆
らうなんて」

と、オネエ口調で話すのはCブロック隊長の『太夫』である。
その名の通り太夫の格好をしているのだが列記とした男である。

「まさか我等隊長陣が一同にこうして集まる事になるとはなあ」
中心に座るのはBブロック隊長の『マック』である。
その名の示すとおり顔はマックバーガーであり、胴体はマックパソ
ンであった。

「そんな悠長な事を言っていていられる場合か？このままでは直に我等のところにも来るかもしれんのだぞ！」

ラノベが机を叩く。

それを聞いたマツクが手元のリモコンを操作して巨大モニターの映像を映し出す。

其処にはヅラを倒した瞬間のスバルが映し出されていた。

「脅威的なのはあのハジケ変身だ。一時的にはあるがあの小娘の姿をかの無敵のハジケリスト『ボボボーボ・ボーボボ』に変えていく」

「私の計算によるとお、その際の戦闘力は元の時より数十倍も上がっているらしいわよん」

「ほおう、それはとんでもない事だな」

太夫の結果にバイオレンスが頷く。

だが、其処でマツクが不敵に笑う。

「だが、それこそが同時に弱点でもある。要はそのハジケ変身をさせなければ良いのだ。計算の結果。変身に掛かる時間は5秒と言う」

「なるほど！つまり変身する前に叩きのめせば良いって事だな！」

「その通りだ。直にAブロック隊長が決まる。そうなる前になんとしてもあの目障りな小娘を始末するのだ！」

マツクが立ち上がって言う。

だが、その途端顔部分のピクルスがスルリと滑り落ちてしまった。

「あ！俺のピクルスが落ちちゃった！やばい！ピクルスがないと俺只のバーガーになっちゃう！」

必死にピクルスを探すマツク。
それを見ていた一同が青ざめた顔をしていたのは言うまでもない。

その頃、スバルとティアナの二人は一路次なる基地『Eブロック基地』を目指して走っていた。
電車・・・ではなく。

「お父さん・・・私はこの掃除機で峠を越えて見せます」
何と掃除機に跨り峠を走っていた。
その前にはクマが運転するフェラーリが走っていた。

「フツ、機体のカスタムは行き届いているみたいだが・・・操縦者の腕がまだ素人だな。無駄に命を散らすだけだぜ」

葉巻を吸いながらニヤリとするクマ。
すると二人の前に急カーブが見えた。
峠の関門である。
クマは勿論其処で減速した。
だが、スバルは減速せずスピードを増した。

其処は毛狩り隊Eブロック基地が収める地『コミックシティ』である。

本来その地は漫画が流行り少年漫画から如何わしい漫画まで何でも揃っている。

此処に来れば手に入らない漫画は無いと言われていたほどである。だが、その地にも毛狩り隊の魔の手が迫っていたのだ。

「酷い……」

街を歩きながらティアナは呟いた。

街の住人の殆どが毛狩りされており皆ツルツルボーズなのである。

「酷い……」

同じくスバルも呟いた。

街行く書店の殆どに漫画が置かれて居ないのだ。

変わりに置かれているのは難しい小説や辞典など面白くない物ばかりである。

「こんな酷い仕打ちってありなの？」

「これ一応『リリカルなのは』も入ってるのよねえ・・・良いの？
萌え要素を此処まで破壊して」

率直な疑問を投げつけるティアナ。

しかし大丈夫だ。

何しろボーボボとコラボしてる時点で色気はゼロと判断して欲しい
からだ。

「先手必勝！ハジケ変身！」

「おおっと、そうはさせないぜ！『読書真拳奥義！がり勉ロツク』」

ラノベが体を開く。

すると中から『東大合格』と書かれた鉢巻が飛び出しスバルの額に
巻かれてしまった。

「なっ！これは一体？」

「フハハ、掛かったな！貴様はその鉢巻を巻いて変身するそうだが、
その鉢巻さえ封じてしまえば貴様は変身出来ない！変身出来ない貴
様など赤子の手を捻る様に簡単に倒せるわ！」

「マジでえー！」

驚くスバル。

つてか、あんたが驚くんかい！

「今までの恨み、此処で返してやる！」『読書真拳奥義！ラブ米アタ
ツク！』」

再び自身の体を開く。

すると中から大量のハートマークと米俵が飛び出してきた。

「うひゃあああ！」

それらを食らったスバルが吹き飛び大地に落下する。
全身傷だらけとなってしまっていた。

「ぐう……つ、強い……」

「スバル！大丈夫？」

「だ、大丈夫……だけど……変身を封じられた今、私の戦闘力は何時もの10分の1以下になってる……もしかしたら勝てないかも知れない……」

青ざめて言うスバル。

その発言にティアナもまた戦慄を覚えていた。

「フハハハハ！ハジケ変身の出来ない貴様など雑魚同然だ！死ねい！『読書真拳奥義！難しい文字弾幕』」

突如ラノベが再び自身の体を開く。

そしてその中から難しい文字が弾幕の様に現れたのだ。

「なんのお！鼻毛真拳だけが私の力じゃないよお！」

そう言うとスバルは額に巻く筈の鉢巻を両手に持つ。

その構えを見てティアナは察した。

そう、スバルにはもう一つの真拳が使えるのだ。

その真拳とは……

「鉢巻真拳奥義！八工叩きならぬ文字叩き！」

鉢巻を八工叩きに見立てて次々に文字を撃退していくスバル。その様は正しく阿修羅の如き勢いであった。

「いやいやいや、ありえないから！八工叩き位で阿修羅とかにならないからねえ！」

はあい、ティアナさんのツッコミどうもです。

何とか文字を撃退したスバルであったがラノベには一向に近づけないでいた。

かなりの文字の弾幕が激しいのだ。

今のスバルでは防戦一方なのだ。

「ガハハハハ！このまま文字に押しつぶされちまえい」

笑いながら言い放つラノベ。

だが、其処へ・・・突如として何かが現れた。

丁度スバルとラノベの間に入ってきたそれは、ボロボロの兎の人形を手に持った少女であった。

「行かないでえウサ男！あたいを置いて行ってくつて言うのぉ？」

『分かってくれヴィータ。男にゃあやらなきゃならねえ戦いつてもんがあるんだ。そしてそれが今なんだよ』

「そんな・・・勝手よ！男は皆勝手よ！女一人残して勝手に逝ってしまうんだもん。残された女はどうするって言うのよ！」

目の前で兎を手に持ったヴィータの三文芝居が展開される。

それを見たティアナは青ざめながら・・・

「何やってんですかヴィータ副隊長おおお！」

と叫んだのは言うまでもない。
するとヴィータがスバルとティアナを見つける。

「あ、お前等丁度良い所に！早くウサ男を止めてくれ！このままじやアタイまた一人になっちまうんだよお」

「嫌、知りませんよ！勝手に兎を放せば良いじゃないですか！それより状況を見て下さいよ！私達苦戦してるんですよ！」

「馬鹿野郎！戦いと恋愛。どっちが大事か普通分かるだろう！」
「あんたこそどっちが大事か良く考えろおおおおおおお！」

ヴィータの言い分にティアナが叫ぶ。

それに今まで黙っていたラノベがヴィータに近づく。

「あのさあ……お前邪魔なんだけど……退いてくんない？」

やんわりとヴィータに言うラノベ。

するとヴィータがラノベを見る。

「お！漫画だあ！読んじやえ読んじやええ！」

「ええええ！嘘！止めてえ！まだ誰にも見せた事ないのに！」

「良いじゃん見せるよお！ギャグマンガかあ？それともラブコメ漫画かあ？」

パラパラとページを捲るヴィータ。

だが、本の内容は完全にヴィータの予想を裏切り漫画ではなく小説であつた。（しかもサスペンス物）

「漢字多くて読めねええええええええええええ！」

泣き喚きながらラノベのページを次々に破っていくヴィータ。

「ぎゃああああああああああ！破らないでえ！まだ他に読む人が居るかも知れないんだからあ！」

(うわあ・・・鬼だ、鬼が目の前に居る・・・)

目の前にヴィータの行いに鬼を感じたティアナである。

そして、やがてページが半分辺りに行ったところでラノベがハッと
する。

「や、止める！そつから先は『官能小説』なんだ！お子様は見ちゃ駄目だ！」

「官能？ねえねえティアア、官能小説つて何？」

「ええ！それを私が説明しなきゃならないのお！」

スバルの問いにティアナは説明を渋る。

つまりそう言う内容なのだろう。

そう察したスバルは。

「面白え！是非見せろお！」

「ヒヤッヒヤッヒヤ！酒池肉林じゃあ！」

ヴィータと共にその官能小説を読もうと二人揃ってそのページに向
ってひたすらページを破る。

「おいしいiiiiiiii！止めるお前等ああああああ！マジでこの小説を18禁にするつもりかアアアアア！マジでヤバイ内容なんだからなあ！後で鼻血が止まらなくなっただって知らないからなあ！」

忠告するラノベを無視して官能小説のページを開く。

だが、其処にあったのはページ一杯にこう書かれているだけであつた……

1 ページ目

『うつふ〜ん』

「「……………」

無反応の二人。

そのまま次のページへ……

2 ページ目

『あつは〜ん』

3 ページ目

「よっしゃあ！この調子でネオ・マルハーゲ帝国をぶっ潰すぞお！」
「それは無理だな」
「え？」

意気揚々と進もうとするスバルの前に一人の人影が現れた。

それは、黒いスーツを身に纏ったガ王と、同じくスーツを身に纏いグラサンを掛けたヴィヴィオであった。

本人達は変装ばっちりのつもりだろうが、ハッキリ言ってバレバレである。

(何やってるの？・・・あの二人)

青ざめながらそう思うティアナであった。

「こ、皇帝陛下！大変です！Fブロック隊長ヅラ様に続いて、Eブロック隊長のラノベ様まで倒されました！」

「ほおう、まさかこの世界にも毛の真拳を使う者がいようとはなあ・・・」

兵士が皇帝の前にそう告げる。

その皇帝はスバルとヴィータがラノベを撃破したシーンを見ていた。そしてスツと立ち上がる。

「計画を繰上げねばなるまい・・・至急準備をせよ！」

「は、直ちに行います・・・皇帝『ツル・ツルリーナ13世』様」

兵士がそう告げて去って行った。

確かに兵士はそう言い放ったのだ。

『ツル・ツルリーナ13世』・・・と。

第2話 終

第2話 ハジケたヒロイン登場！『ウサ男・・・あたいを守ってくれ！』（後書

次回予告

ティアナ

「あのガ王がスバルと激突っ？」

スバル

「上等だよお！どっちが可愛い系か勝負だあ！」

ティアナ

「ええ！そっちの勝負う！」

ヴィータ

「いや、ハジケ勝負だな。まずは二人共この練りわさびを一気飲みしろ」

ティアナ

「しょっぱなから無理難題だああ！」

ガ王

「次回、真説！リリカルポーボボ

『激突！ガ王 対 スバル！どっちが可愛い系？』」

ティアナ

「やっぱ・・・可愛い系で勝負するんだ」

第3話 激突！ガ王 対 スバル！どっちが可愛い系？（前書き）

前回のあらすじ

スバルのハジケ変身に遂に弱点が露見してしまった。
それは……

ヴィータ

「アスパラを食べなきゃ駄目なんだ！」

ティアナ

「全然違いますよ！」

はい、ティアナさんの言う通りです。

ハジケ変身の弱点は……

その1 『額に鉢巻を巻かなければ変身できない』

その2 『変身に使用する時間は5秒』

その3 『変身時間は僅か3分』

その5 『変身しなければ鼻毛真拳が使えない』

その5 『時々山田さんの匂いを放つ』

と言う物である

ティアナ

「ってか、その5って明らかに関係ないじゃん」

とまあ、ティアナさんのツッコミは置いておいて早速リリカルポ
ボが始まります

第3話 激突！ガ王 対 スバル！どっちが可愛い系？

第3話 激突！ガ王 対 スバル！どっちが可愛い系？

スバル、ティアナ、ヴィータの三人の前に突如として現れたガ王と
ヴィヴィオ。
そして、ガ王が告げた。

「今のお前ではネオ・マルハーゲ帝国は倒せない」・・・と。
そして、スバルは思っていた。

(今晚のサザエさんの予約したかなあ)・・・と。

「って、全然噛みあってないじゃない!」

早速ティアナのツッコミが炸裂する。
のは良いとして・・・

「あれえヴィヴィオじゃん。久しぶりい」
「ヤッホー、皆元気だったあ?」

三人は早速ヴィヴィオと会話を楽しむ。
無論その間ガ王は無視であるが。

「良いか女。お前はハジケ変身に頼りすぎてる傾向がある。それじゃ今までは勝ててもこれからは勝てないんだぜ」

シリアスな話をするガ王。

だが、その時スバルはと言つと。

「ところでヴィヴィオこの数ヶ月どうしてたの？」

「うん、ヴィヴィオはね・・・この数ヶ月間ずっと皆を探して走ってたんだ」

とは言うが彼女の脳裏に浮ぶ光景は・・・

『池でバス釣りを楽しむヴィヴィオ』

『山でバーベキューを楽しむヴィヴィオ』

『海でサーフィンを楽しむヴィヴィオ』

『スカイダイビングを楽しむヴィヴィオ』

等などであつた。

「って、これあんたこの数ヶ月間遊びまくってたって事じゃない！何わたしは必死でしたって顔してんのよ！」

ティアナが叫ぶ。

それに対しヴィヴィオは可愛く舌を出して笑顔になる。

これで許して・・・と言う意味なのだろうが、ハッキリ言つと余り許せた物じゃない。

「そうなんだ、私もこの数ヶ月間大変だったよ。何しろ毛狩り隊との戦いがあったから」

スバルが自信を持って言う。

だが、そんなスバルの脳裏に浮んだのは・・・

『冷蔵庫の扉にピッタリと張り付いたスバル』

であった。

「・・・あんた毛狩り隊と戦ってたんじゃないのお！」

「くっ、苦しい戦いだった」

「そりゃ確かに苦しいわよ！冷蔵庫の扉に張り付いてたらねえ」

最早呆れ果てるしかなかったりする。

「フツ、だが安心しな。俺が来たからには俺がお前の潜在能力を解放してやるぜ」

ガ王がようやく話を終えたようだが、俄然無視である。

「やれやれ、てめえら遊んでばっかだったんじゃないか。アタイはちゃんと戦ってたぜ」

ヴィータがフツと笑いながら言う。

だが、そんなヴィータの脳裏に浮んだのは・・・

『ウサ男と遊園地でデートするヴィータ』

『着替えをウサ男に覗かれて赤面するヴィータ』

『浜辺で追いかけてこするウサ男とヴィータ』

『夕日の丘で互いのキスをするウサ男とヴィータ』

勿論全てフィクションです。

「苦しい戦いだった」

「もうツツコミきれん」

流石にくたびれたのか諦めモードになるティアナ。

「おおい、話聞いてるう？」

流石に我慢の限界だったらしく涙を浮かべて尋ねるガ王。

そのガ王を皆が一斉に見る。

「あれ？コアラが居る・・・ってか、誰コイツ？」

「さあ？動物園から逃げ出したコアラじゃない？」

「ここぞとばかりに皆知らん顔かいいいいい！」

スバルとヴィヴィオの反応にティアナがツツコミを入れる。

するとスバルは即座にガ王を檻に入れる。

「うつしやあ！それなら動物園に売り払ってそのお金で美味しい物食
いまくるぞお！」

「ナイスアイディアア！」

「ええええええ！俺売り飛ばされるのぉ！止めて！止めてえ！あそこ
にはアイツが・・・アイツが居るんだあ！あの客寄せパンダが・・・
あの客寄せパンダが居るんだあぁあ！」

（何だよその客寄せパンダって・・・）

涙を流すガ王の台詞に青ざめるティアナ。

「けどよお、そのコアラ売れるのか？あんま可愛いくねえぞ」

「え？マジ？・・・うん、確かに言われて見れば可愛くない気も
しなくもない」

マジマジとガ王を見詰めるスバル。
そして、檻を床に置き。

「キャッチアンドリリース！」

檻ごとガ王を蹴り飛ばす。

「ふう・・・やっぱキャッチアンドリリースの精神が必要だよねぇ」
「今のが？どう見ても行き過ぎた虐待だよ！」

額の汗を拭うスバルにティアナが怒鳴る。

「フツ、流石はあのボボボーボ・ボーボボが認めた娘だけの事はあ
る。かなりのハジケっぷりだぜ」

「なっ、このコアラボーボボさんの事を知ってる！」

ガ王がボーボボの名を出した途端スバルの目の色が変わった。
それを見たガ王がニヤリとする。

「フツ、その通りさ、何を隠そう俺は・・・」

「コアラの分際で何ボーボボさんの名前使つとるんじゃボケエエエ
エエエエ！」

額に青筋を大量に浮かべたスバルがそのままガ王を蹴り飛ばす。
その際にガ王が「グバァ！」と叫びながら吹き飛んだのは言うまで
もないのだが。

そして地面に激突したガ王をそのまま巨木に礫にしたスバルはヴィ

「タとヴィヴィオを使用してガ王にこの世では味わえないような拷問を開始した。

まずスバルはガ王の頭から大量の蜂蜜を塗りたくり、その下ではヴィータがガ王を藁人形代わりに釘を打ち付けたり、因みに写真には歴代リリカルヒロインの顔が映った写真が貼られている。

その下では更にヴィヴィオが焚き火の如き火を轟々と焚いている。

「オラ吐けや！てめえ一体ボーボとどんな関係なんだあ？もしかして毛狩り隊のスパイかなんかかあ？」

「さつさと吐きやがれこらあ！でないとカブトムシの餌にしちまうぞボケがあ！」

「早くしないと焼き芋が焼けちまうぞゴラア！」

スバル、ヴィータ、ヴィヴィオの三名がこれ以上ないメンチを切つてガ王に詰め寄る。

そんなガ王は既に虫の息である。

「つてかああ！あんたらやり過ぎでしょ！それ以上やったらガ王死んじやうから」

そんな三人をティアナが宥める。

そしてそつとガ王を降ろす。

「大丈夫？ガ王」

「さ、流石はティアナさんだ・・・俺が惚れた女だけの事はある」

「え・・・ええええええええええ！何それええええええええええ！」

いきなりの告白宣言に慌てるティアナ。

その横では三人のハジケトリオが満面の笑みで手を叩いていた。

火器を装備しそのトリガーを一気に引いた。

「奥義『エンドレス終りなき平和』ピース」

「奥義名と内容が全く噛み合っていないいいいい！超極悪奥義の炸裂
うううううううううう！」

ティアナの言うとおりに奥義名と内容が1ミリもかみ合っていない超極悪殺人奥義がガ王に炸裂したのだ。

それを食らったガ王が『グベラビヤア』と叫びながらキリキリと宙を舞う。

だが、それこそがガ王の狙いだったのだ。

「甘い！この浮遊を利用して一気に僕の距離に来れたよ！コアラ骨法」

「ぐわあ！」

爆風の風圧を利用して一気にスバルの目の前にやってきたガ王が早業でスバルの腕に一撃を当てる。

すると、どうしたのだろうか。

スバルの腕が全く言う事を効かないのだ。

ダランと下に垂れてそのまま動かなくなった右腕を押さえながらスバルはガ王を睨む。

「お、恐るべし・・・コアラ骨法」

「どんな強者でもコアラ骨法は一撃の元に殺せる。君だけだよ。急所をずらしてかわしたのは」

其処には先ほどとは違って太い眉毛に鋭い眼光をした男らしい顔つき
のガ王が居た。

「フツ、腕一本で済んだのが幸いだっただぜ。もしかわしきれなかったら背骨丸々一本やられてたからな」

腕を抑えながらスバルが言う。

しかしその時の顔はヒゲを生やしたダンディーな顔つきになった。

「また男になってる・・・あんた女って自覚持っていないの？」

ティアナが呟く。

恐らくあるんでしょうが生憎これギャグ小説なのでピンクシーンはほぼ皆無でしょう。」

「恐ろしい、何者なんだあのコアラ」

「本当だよ。一体あのが王って人は何者なんだろっ？」

ヴィータとヴィヴィオの二人が冷や汗を流してガ王を見る。

「ってか、ヴィヴィオ！あんたあのが王と一緒にラジオ体操してたじゃない！何で知らないのよ！」

冒頭の第一話を思い出させる台詞である。

が、其処は無視しておく。

「さあどうする？片腕ではハジケ変身は出来まい。貴様の変身するには鉢巻を頭に巻かなければならない。だが、お前が鉢巻を巻く前に俺のコアラ骨法で貴様の首の骨をへし折れるがな」

ニヤリとするガ王。

だが、スバルはニヤリと笑っていた。

「甘いねガ王君。この私が伊達に数ヶ月過ごしてきた訳じゃないんだよ。今こそその片鱗を見せるよ」

ニヤリと笑ったスバル。

それに眉を弾く付かせたガ王が飛びかかる。

「ならば見せてみる！その片鱗とやらを」

「おう！これが・・・これが私の『鼻毛真拳』だあああああああああああああああ！」

飛びかかったガ王に向かいスバルは叫ぶ。

そして彼女の鼻から何と鼻毛が出て来たのだ。

それがまるで鞭の様に撓りガ王を吹き飛ばす。

「鼻毛えええええええええええええええええええええええ！おい作者あああああああああああああ！お前マジでリリカルファンに殺されるぞおおおおお！」

あろうことかスバルの鼻から鼻毛が飛び出した事にティアナは絶叫する。

そんなのは無視して勝利したスバルは倒れたガ王の前に立つ。

「フツ・・・み、見事だったぜ・・・お前の鼻毛真拳・・・そこそボーボボを次ぐハジケリストの証・・・お前なら・・・きつと、ネオ・マルハーゲ帝国を滅ぼせる筈だ」

「ガ王・・・君はその為に私に戦いを・・・」

「フツ、止せよ、恥ずかしいじゃねえか」

フツと笑うガ王。

だが・・・

「コアラの癖に生意気じゃゴラアアアアアアア！」
「ゲボオ！」

容赦なくガ王を蹴り飛ばすスバル。

蹴られたガ王はそのまま遙か彼方の地面に激突する。
するとそんなガ王の頭上に何と巨大なロードローラーが降って来たのだ。

「ウイイイイイイイイイイイイ！」

ロードローラーの上にはあのスバルが居た。

そして勝利の雄たけびを上げる。

「やりすぎじゃあああああああああああああああ！」

それを見たティアナが絶叫したのは言うまでもない。

『これが・・・これが私の鼻毛真拳だあああああああああ！』

その頃、ツルツルリーナ13世はスバルとガ王の戦いを見ていた。

「ほう、この世界にも鼻毛真拳を使う者が居たとはな・・・いよいよ、あいつらの出番か」

映像の前で鼻毛真拳を使い勝利を収めたスバルに対し、ツルツルリ
「ナ１３世は不気味に微笑んだのであった。」

第3話 終り

第3話 激突！ガ王 対 スバル！どっちが可愛い系？（後書き）

次回予告

スバル

「鼻毛真拳解禁」

ティアナ

「このままだとマジでファンに殺されるわよこの作者」

スバル

「平気だよ。私は痛くも痒くもないし」

ティアナ

「最悪だ、最悪の主人公だ」

スバル

「さて、次回はまた仲間が増えるみだいだよ」

ティアナ

「お願いします！どうか普通の仲間をお願いします」

????

「次回『真説！リリカルボーボ』」

『やっと登場！ハジケキング・・・とこけしの人？』」

ティアナ

「こけしって誰え！」

第4話 やつと登場！ハジケキング・・・とこけしの人？（前書き）

前回のあらすじ

突如として現れた大魔王「ルシファーパッチ」に攫われた「なのなの姫」を救う為に勇者スバルの冒険が始まる・・・

ティアナ

「って、これ全く違う話じゃない！」

はあい、そんな感じで始まりますよお

第4話 やつと登場！ハジケキング・・・とこけしの人？

第4話 やつと登場！ハジケキング・・・とこけしの人？

ヴィータに加え、新たにガ王とヴィヴィオを仲間に加えたスバル達
一向は次なる仲間を探しながら毛狩り隊の基地を目指していた。

「マミーポコ・・・マミーポコ・・・マミーポコ・・・」

(・・・何やってんの？)

ティアナの目の前ではSM女王風の服装を着たガ王が目隠しをされ
た上に手足を縛られて宙吊りになったまま意味不明な言葉を連呼し
ている場面であった。

しかもそんなガ王をスバルが変な荷台に吊るして運んでいる。

因みにヴィヴィオとヴィータはその光景になんら違和感を感じてな
どいなかった。

唯一感じているのがティアナだけなのだ。

(話の冒頭からこんなツッコミ度マックスな事しないで欲しいわ。
今の所ツッコミって私しかないのに・・・)

「ちよ、何してるのよスバル！大丈夫ガ王？」

「へへ、流石は姐御だ、一切の甘えがねえ・・・動物愛護団体には黙っておきますよ」

心配するティアナを他所にガ王は何故か満足そうな顔をしていた。

「しっかし、本当にこんなトコに居るのか？あたいらの仲間が」

ヴィータが辺りを見回しながら呟く。

と、言うのも実は此处・・・毛狩り隊Dブロック基地内部だったりする。

「って私達何時の間にか敵基地の真っ只中に来てるしいい！」

すかさずティアナの絶叫が木霊する。

その絶叫を聞いた毛狩り隊員達が一斉に振り向く。

「ああ！スバルだ！あのスバルが居るぞ！」

「本当だ！何時の間に侵入したんだ！」

突然のスバルの出現に隊員達は大慌てしていた。

だが、当のティアナは何故か青ざめていた。

（何で気付かないの？）

そう思うのも無理は無さそうである。

「ちっ、見つかったちゃった以上はしょうがないね。やるよ皆」

「おうよ！あいつらにあたい達のハジケを思い知らせてやるよお」

「ハジケモード！」

早速戦闘態勢を取るスバル、ヴィータ、ヴィヴィオの三名。だが、何故か三人共スーツにタスキを掛けているいかにも選挙に出る人達のような格好をしていた。

「真説・鼻毛真拳協力奥義『選挙大戦争』」

スバルの奥義が炸裂する。

車に乗ったスバル、ヴィータ、ヴィヴィオの三名が演説をしながら乱暴な運転をする。

その運転に多数の毛狩り隊員達が巻き込まれていく。

「これ間違いなく落選確実な議員のお手本だよお！」

それを見たティアナが叫ぶ。

確かにその通りではある。

「くそお！まずはあの女から毛狩りしてやる！」

「え！」

突如後ろで倒れていた毛狩り隊員が起き上がりティアナを狙い手を伸ばす。

だが、其処へガ王が飛び掛り。

「コアラ骨法」

「がはあ！」

コアラの細い手が隊員の首根っこを掴みありえない方向に曲げる。それを食らった隊員がそのまま倒れた。

「安心してくれセニヨリータ。君の命は俺が守るぜ」

振り返り様にティアナにアプローチを掛けるガ王。
だが、当のティアナはと言うと。

「あんた達ふざけ過ぎよ！此処は敵基地なんだから少しは真面目にやりなさいよ！」
『御免なさい』

ふざけまくっていたスバル、ヴィータ、ヴィヴィオ達を叱っていた。
無論ガ王の事は無視である。

「・・・・・・・・」

ガ王は笑顔ではあったが何故か瞳にはうつすらと涙が滲んでいた。
そんなこんなで基地内の毛狩り隊を倒したスバル達は隊長の待つて
いるであろう最上階を目指す事にした。

「Dブロック基地隊長・・・一体どんな奴かしら？」

「ねえママア。あたいお腹空いちやったあ」

「え？ママア！」

いきなりヴィータがティアナをママと呼び出した。

それには本人も驚く。

だが、その横では更に驚くべき光景が展開していた。

「ハッハッハッハ、ヴィー子は本当に食いしん坊だなあ」

「フォッフォッフォ、まっひやく、だれに似たんじやろうっねえ」

其処にはダンディーな姿になったお父さん姿のスバルとよぼよぼの老婆姿になったヴィヴィオが居た。因みに何故かガ王は愛犬の役をしていた。

「何？私に飯事やれっての？言っとくけどそんな事やってる暇ないのよ」

『チエ〜』

ティアナに断られたせいも皆つまらなさそうな顔をしていた。そうこうしていると一同は最上階に辿り着いた。

「さあ、出て来い！Dブロック隊長！」

勇ましくエレベーターから出て来たスバル。だが、そんな彼女達の前には三人の戦士が立っていた。

「遅かったな。待っていたぞ」

「あらあん、結構な可愛い子じゃない」

「貴様は今日此処で我等に倒されるのだ」

何と、其処にはD〜Bブロックの隊長が勢ぞろいしていたのだ。

「嘘！三人の隊長が勢揃いしてる！」

「これ以上貴様のせいで損害を出させる訳にはいかないんでな。我等三名が貴様等を地獄に叩き落す」

「ハン、探す手間が省けたってもんだぜ。お前等纏めて叩き潰す」

腕を鳴らしてスバルが言う。

だが、その直後であった。

いきなりスバルの前にDブロック隊長バイオレンスが居た。

「なっ！」

「もう戦いは始まってらんだぜ！残虐非道真拳奥義『バイオレンス
カッター』」

「うひゃあああああああ！」

バイオレンスが腕を×印にクロスする。

するとスバルの胸に×印の切り傷がつきながら空中に放り上げられ
る。

「おほほほ！次は私よおん！舞妓真拳奥義『殺戮の野球拳』」

今度は上空に飛んだ太夫の奥義が炸裂した。

無数のグー、チョキ、パーが飛び交いスバルに命中する。

「グハッ！」

吐血したスバルがそのまま大地に激突した。

「トドメは俺だ！『バーガープレス』」

最後にマックが倒れたスバルに向かって巨大なハンバーガーを叩き
つけた。

「ゲボオ！」

それを食らったスバルが成す術もなく巨大なハンバーガーの下敷き
となってしまった。

うっすらと巨大ハンバーガーからはスバルの手が見れるが痙攣して
いるだけらしく動く気配がない。

「これで終り？ 案外呆気ないな」

「ほおんと、何だか拍子抜けしちゃうわぁん」

「嫌、我等が強すぎたのだから」

スバルを倒したとの事で三人は大笑いしていた。

「嘘、スバルがやられたの？」

ティアナは青ざめた。

何しろあのスバルがあつと言う間に倒されたのだから。

「ううう、死なないでスバル〜」

「スバル・・・つて、何であんたが横に居るのよお！」

ティアナが叫ぶ。

それは、何故か隣にはあのスバルがハンカチで涙を拭いていた。

「あれえ！ スバルが二人？」

「え？ じゃあ今バーガーで下敷きになってるのつて誰？」

三人が巨大バーガーを引つpegす。

すると其処には何故かヴィータが潰れていた。

「あ・・・あの野郎・・・何時かぶつ飛ばす」

「これぞ真説・鼻毛真拳奥義『変わり身 in 2011』」

「何とんでもない事してんじゃおのれはあああ！」

あるつことか副隊長を変わり身に使用した事にティアナが怒鳴る。
だが、スバルは余り気にしてない様子である。

「さっきので大体あんたたちの実力は分かったよ。次はこっちの番だよ！」

スバルが三人の前で奇妙な構えを取る。

「真説・『ポポポワールド聖鼻毛領域』」

スバルが叫ぶ。

すると世界が一変した。

何と回りが何と言うかハジケまくりな世界になっていたのだ。

「なんじゃ此処はああああああああああ！」

それを見たティアナが叫ぶ。

そして、チラリと横を見ると其処には。

「カーネルさんダー！カーネルさんダー！」

「ピクルスピクルスピクルス！」

「アップチヨマウマウ！アップチヨマウマウ！」

其処にはハジケまくりのヴィヴィオ、ヴィータ、ガ王の三名が居た。

「な、何だこの世界は？」

「一体何をしたんだ？」

「これは、幻覚か何かか？」

隊長達三人も驚きだす。

そんな中、スバルが説明した。

「ボーボワールドは魂を解放する世界。お前達の魂に直にダメージを与える事が出来る！」

「説明が長い！」

「グバア！」

説明し終わった直後にヴィータが巨大なモアイ像でスバルを殴り倒す。

すると何故か隊長達が突如として苦しみ出した。

「ぐあつ！な、何だこれは……」

「か、体が苦しい……」

「ぐぐ……体が燃えるようだ」

そう、これこそが魂に直にダメージを与えると云う事らしいのだ。

「まずはお前！そのバイオレンスな顔はこの世界には合わない！よって私達がお前をコーディネイトする！」

「ええ！まず俺なお！」

バイオレンスな顔であるが故にいきなりターゲットにされたバイオレンス。

その前には一流デザイナーっぽい服装をした三人が居た。

「一流ハジケデザイナー昂。さあ、今日もお客さんをコーディネイトしちゃうぞあ」

そう言つてスバルが手に持ったのは何故か巨大なハサミであった。

「まずはその邪魔な首をちょん切つてえ」

「いきなりバイオレンスだああ！」

のっけからバイオレンスな展開にティアナが絶叫した。

「それから次に白菜を巻いてえ」

「や、止めるお！」

「次にもじやもじやした生き物を頭に乗つけて」

「ぎゃあああああ！頭を齧るなこの異常生物う！」

「それからこのバニースーツを着用してえ」

「いてて・・・大事な部分が食い込んでる！かなり痛いからあ」

「完成！」

其処にあったのはメルヘンチックな服装になり目が乙女漫画チックな輝きを放つメルヘンなバイオレンスが居た。

「わ、私・・・メルヘンになっちゃいましたグバア！」

言い終わる前に吐血して倒れるバイオレンス。

「いええい、一人撃破あ・・・さて、次の獲物は・・・お前じゃあ！」

何故かバイオレンス風になったスバルが次に指差したのは太夫であった。

「うそお！私なのお！」

「お前なんかオカマっぽいから男の世界にご招待」

そう言つてスバル、ヴィヴィオ、ヴィータの三人と共に招かれる世界の名前が表示される。

『ドキッ！男だらけの血みどろ喧嘩祭り』

「何この背筋の凍りそうなタイトルは」

浮かび上がったタイトルに不安がるティアナを他所に映画が上映される。

「てめえ、本気で言ってるのか？」

「ああ、本当だぜ美威蛇^{ワイター}」

「ふざけんじゃねえぞ棲馬流^{スバル}！てめえ一人でかっこつけてるんじゃねえよ！」

美威蛇が棲馬流の胸倉を掴み上げて怒鳴る。
するとその間に割って入るように一人の男が入る。

「待て二人共！それなら俺も一緒に行くぜ」

「^{ワイワイオ}毘毘男」

二人が名前を叫ぶ。

「な、何言ってるんだ毘毘男！お前その体で無茶だぜ」

「へん、無茶は最初から覚悟してるぜ！だがなあ、ダチ公を見捨ててオネンネなんかできねえんだよ」

「毘毘男・・・ったく、おめえって奴あ」

それを聞いた棲馬流が涙する。

隣では同じく美威蛇も泣いていた。

「うつしやあ！こうなったら俺たち三人で殴りこみじゃあ！」
「おっ！」

棲馬流、美威蛇、毘毘男の三人が手を振り上げて叫ぶ。
そしていざ決戦の地へと赴く。

『ピンポーンパーンポーン』

只今より、タイムセールスが開始されます。全品半額です』

”ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！”

此処はとあるデパートの売り場。

其処で三人は主婦連中と激しい戦いを繰り広げていた。
タイムセールスと言う名の戦いを。

そして、その戦いの結末は・・・

「ぐはあっ！ま・・・負けたぜ」

「あいつら・・・強え・・・」

「俺たちじゃ・・・勝てねえ」

見事に玉砕した三人が売り場の外で大の字になって倒れていた。
薄れいく意識の中で三人の目の前には三人が命掛けて手に入れよう
としていた物が空に浮んでいた。

「欲しかったぜ・・・うまい棒『水戸納豆味』」

完

「一体全体どんな話なんじゃこれはあああああああああああ
あ！」

話が終った途端ティアナがツッコんだ。
そしてスタッフロールが流れる。
すると、その中に何故か太夫の名前があった。
しかも映像担当で。

「あんたも担当に入ってたのおおおおおお！」
「ガハアツ！あたいを映像に入れるなんて・・・なんて恐ろしい・・・」

太夫がそう言って力尽きた。
残るはマツク一人である。

「よおし、トドメは私達四人の合体奥義で行くよお」
スバルを中心にヴィータ、ヴィヴィオ、ガ王が並ぶ。

「く、来るなあ！何をする気だあ！」
『合体奥義！ウイルス混入』

スバル、ヴィータ、ヴィヴィオがそれぞれウイルスの様な体に変化させマツクを内部から破壊していく。
頭部のバーガーは腐敗し、胴体のコンピューターのマツクはウイルスが侵入し使えない状態になってしまった。

「グベラビヤア！お、恐ろし過ぎる・・・ポーボボ・・・ワール・・・」

言い終わる前にマツクは倒れた。
それと同時にポーボワールドが消える。

「終わった。残るはAブロック隊長のみ」

スバルが拳を握り締めてそう呟く。

「流石だな、スバル」

と、ふと部屋の最奥から声が響いた。
見ると其処には見慣れた女性が居た。
ピンクのポニーテールに腰に挿した刀剣型デバイス。
間違いなく彼女はシグナムであった。

「シグナム副隊長！今まで何をしていたんですか？」

「ティアナ・・・私はお前等に謝らなければならぬんだ」

「何！お前まさか・・・」

「・・・ああ、そうだ」

「くそつ、馬鹿野郎！あれ程ビデオ録画はちゃんと確認しろって言

「ただらう!」

「はあ!ビデオ録画?何の事だ!」

いきなり意味不明な事を言うヴィータにシグナムが目を見開いて見る。

「あれ?違うの?」

「違うわ!実は私は今毛狩り隊Aブロック隊長をしているんだ」

「なあんだ。そんな事か・・・って、何iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiいいいいいいいい!」

シグナムの放った言葉は正に衝撃であつた。

と言ふより衝撃的であつた。

「嫌、意味同じだと思つんですけど」

と、まあさり気ないティアナのツッコミは置いておいて、シグナムがある事か毛狩り隊Aブロック隊長になつていたのだつた。

「一体、どうしてなんですかシグナム副隊長!あなたほどの人が何故毛狩り隊なんて」

「すまない、ティアナ・・・話せば長くなるが、実は・・・」

『裏切り者おおおおおおおおお!』

「ブベラア!」

シグナムが事情を説明する間もなくスバル、ヴィータ、ヴィヴィオの三人に蹴り飛ばされる。

そして壁の向こうにと吹き飛ばされるシグナムであつた。

「ちよつとおおおおおお!何してんのよあなたたちは!」

「ティア、もう昔のシグナム副隊長は居ないんだよ。だつたらせめて私達の手で眠らせてあげないと」

「あんたは何をどう勘違いしたらそう言う結論に辿り着くのよ！さつき事情を説明しようとしてたじゃない！少しは聞きなさいよ！」

ティアナが怒鳴るがスバルは全く気にしていない。
するとよろよろとシグナムが立ち上がってきた。

「フツ、殴られて当然か、確かに私はそんな事をしでかしてきたんだ。当然の報いだな」

「うつしやあ！いい覚悟じゃ！其処に直れ！その頭かち割ってやらあ！」

ヴィータが叫び飛び上がる。

しかし手に持っているのは何故か猫じゃらしであった。

「猫じゃらしでえ！無理でしょ！」

ティアナが叫ぶなかヴィータがシグナムに殴りかかる。
正にその時であった。

「デイベインバスター！」

「サンダーレイジ！」

『ぎゃあああああああああああ！』

突如として桜色と黄金色の閃光がスバル達を包む。

「この魔力砲・・・まさか！」

「迎えに来たよ。シグナム」

「余り一人で出歩かないで。今はまだメンバーが少ないんだから」
「そうだったな。すまん」

シグナムの隣に降り立ったのはあの高町なのはとフェイト・テストア
ロツサであった。

「な、なのはさん！それにフェイトさんも・・・一体どうしてです
か？」

「御免ねティアナ。私達・・・実は今毛狩り隊の隊長をやっている
の」

「でも、これも全てこの世界を元の真面目でバトルでリリカルな世
界に戻す為なの。信じて」

「なのはさん、フェイトさん」

何と言う事であろうか。

あのなのはとフェイトがある事か毛狩り隊の隊長になっていたの
だ。

すると瓦礫の中からスバル達が復活してきた。

「ぶはあ！死ぬかと思った！」

三人と一匹がそう言う。

その全員が爆発アフロヘアーになっていたのは言うまでもない。

「ティアナ。一緒に来て。貴方なら分かるはずよ。こんな世界間違
ってるって」

「だから、一緒に直そう。元の世界に戻す為に」

「すみません、それは出来ません」

ティアナなのはとフェイトの誘いを断った。

「何故だ？ティアナ。お前はこいつらと違ってまともな神経を持っているはず。なのに何故だ」

「確かに、私だって元の世界に戻りたいです。でもその為に悪事に手を染めるなんて出来ません」

「そっか、残念だね。それじゃ、皆此処で頭冷やしてあげるよ」
『冷やしてまあす』

なのは目の前でスバル達は氷枕で寝ている。
まあ冷やしているとえばそうであるが。

「まともになりなさいよあんたたちはあ！」

「ほらね、その子達に期待しても駄目だよティアナ。貴方はこっこの人間なの」

「なのはさん・・・私は・・・」

ティアナが暗い顔になる。

だが、その時であった。

「待て待てい！勝手に家の嬢ちゃんを持っていくのは勘弁願いたいのお」

「す、スバル！」

何故か極道姿になったスバルがメンチをきりながらなのは達に言い放った。

「ええか！確かにティアナは真面目かも知れんがなあ。こっちにとつちや貴重なツッコミ役なんじゃない！」

「結局私はツッコミでしか価値の無い女なのかい！」

「じゃけどなあ。こいつが居るからわし等は戦えるんじゃない！」

「え！」

いきなり真面目な事を言ったためにティアナは言葉を失った。
その間もスバルは続ける。

「どんなに強敵が出てきてもどんなにピンチになっても、ティアアが居てくれたらわし等は勝てるんじゃない！」

「その通りダベえ！」
「んだんだ！」

その隣では何故かいなかったヴィータとヴィヴィオが頷いていた。

そしてガ王は何故かティアナが行ってしまわないようにと目で訴えていた。

「せやからのあ、ティアは渡せへんなあ」

「そっか、それじゃ、貴方たちを始末して連れて行くわ」

なのはが冷めた顔でそう言って魔力砲を連射する。

「真説・鼻毛真拳奥義『コアラガード』」

「ぎゃああああああああああああああ！マスコットに対してこの仕打ち！覚えておれえええええええええ！」

マスコットキャラがあらうことか盾変わりにされた事にガ王が怒る。しかし、そんなのポーボボでは当たり前なのだ。

「スバル！目を覚ましなさい！」

フェイトが続けて叫びながらバルディッシュを振るう。

それをスバルはマジックハンドで受け止める。

「掛かったわね！」

「なに！」

「貰ったあ！」

両手が塞がったスバルに向かい今度はシグナムが突っ込んできた。レバンティンを水平に構えて突進してくる。恐らくそのままスバルを突き刺すのだろう。だが、その時であった。

「いけないなあ、食事時には静かにするのが礼儀と言う物だよ」
「今が食事時とは思えませんが」

突如としてシグナムの目の前に巨大なご飯が現れた。そしてレヴァンティンの一撃を防いだのだ。

「な、何だこれは！」

「それは僕の『米真拳』だよ」

「まさかこの世界にも毛狩り隊が猛威を振るっていたとは・・・恐ろしい限りです」

そう言っつてスバル達の前に現れたのは、元キングオブハジケリストの『ライス』

そして軍艦の部下である『スズ』の二名であった。

こうして、スバル、ヴィヴィオ、ヴィータ、ガ王、スズ、ライス 対 なのは、フェイト、シグナム のルール無用デスマッチが開幕したのであった。

え？ティアナはどうしてるかって？

彼女は勿論ヒロインなので解説に回って貰います。

「何、この扱い？」

第4話 終

第4話 やつと登場！ハジケキング・・・とこけしの人？（後書き）

次回予告

スバル

「新しい仲間も増えたしさあ、バトル開始だあ」

ティアナ

「って、何言ってるのよスバル！相手はあのなのはさん達なのよ！」

スバル

「ティア！たとえ相手が誰であろうと負ける訳にはいかないんだよ！」

ティアナ

「い、以外と説得力があるわね」

スバル

「次回『真説！リリカルボーボ』」

『デスマッチ開幕！ハジケリスト 対 マジメリスト』」

ティアナ

「私もハジケリストに入っちゃおうの？」

おまけ 原作第8話 b yポポポバージョン（前書き）

原作で結構トラウマシーンであるあの場面をポポポメンバーが再現
してくれませ
ん
ど
う
ぞ

おまけ 原作第8話 byボボバージョン

その日、此処六課訓練場には新人メンバー四人と隊長副隊長のメンバーが揃っていた。

「大丈夫かなあ？パッチさんに天のさん」

「さあ・・・ってか、俺達この役なんだなあ」

其処には最初に模擬戦を行う事になったパッチと天のの気を使うビュティ・ルシエとヘッポコ・モンディアルの二名が居た。

んで、その隣には腕を組んでクールに佇むぐるぐる頭の執務間が居た。

「心配ないだろう。奴等なら今までどおりの力を発揮すれば問題あるまい」

と、言つて黒い執務官服を着た（何故かスカートとストッキング着用）ソフトン・テストロツサが居た。

（す、凄いミスマツチだ）

ヘッポコがそれを見ながら思わずそう呟いた。

そうこうしている内に訓練場に三人が集まってきた。言わずもがなナーノハにパッチ、そして天のである。

「さあ、今回も模擬戦頑張るよお」

意気揚々と言うナーノハ。

しかしその隣では真剣その物の顔になるパッチと天のが居た。

(いいわね、天の。あの時の練習通りにやるわよ)
(任せてよパッチ。絶対にナーノ八をぶちのめしてやるっよ)

と、ヒソヒソと語り合う二人。

どうやら秘策があるようだ。

そしてそんな三人に向かい試合開始のホイッスルが鳴り響く。

「先手必勝！」

と、言うが否やいきなりナーノ八が砲撃の雨霰を降らしてきた。

「「ぎゃあああああああああああああああ！！！」

開始早々それを食らった二人が吹き飛びながら絶叫する。

「ええええええ！いきなり隊長が攻撃したああああ！？」

その光景にビュティが叫ぶ。

余りにも理不尽であった。

「馬鹿めえ！戦いは既に始まってんだよお！油断しているてめえらが悪いのさあ！」

其処には滅茶苦茶極悪人の顔になって笑っているナーノ八が居た。

そして彼女？の面前にはパッチ達の居たであろう地点に凄まじい黒煙が上がっていた。

其処に悠々と降り立つナーノ八。

「どおれ、流石にくたばったかなあ？」

骸を確認しようと余裕しゃくしゃくで降りてくるナーノ八。
だが、その時であった。

「隙あり！」

「何！？」

突如黒煙の中からパッチがドンパッチソードを振りかざして現れたのだ。

咄嗟に迎撃しようとしたナーノ八を後ろから現れた天のが羽交い絞めして抑える。

「おのれえ！小癩な真似をお！」

「今だパッチイ！私ごとこいつを倒せえ！」

羽交い絞めにした天のが叫ぶ。

だが、その途端パッチの手が止まった。

顔が震えている。

「そんな・・・そんな事、私には出来ない・・・出来ない・・・出来ないよおおおおおおお！」

涙を流しながら叫ぶパッチ。

しかしその体は両手にバズーカ砲を持ち足ではミサイルのスイッチを何度も踏みまくってミサイルを撃ちまくると言う明らかに矛盾した姿が映っていた。

「ぎゃあああああああ！」

「言葉と行動が1ミリも合っていないいいいいいい！！！！！！」

パッチの攻撃に吹き飛ばすナーノハと天の。そしてそれに対してツッコミを入れるビュティ。やがてパッチが攻撃を止めると、その煙の中からうつ伏せに倒れたナーノハと虫の息の天のが立っていた。

「おお！天のさんが立ってる！」

「まだ生き残りが居たかあ！」

天のが立っていた事に喜ぶへっポコ。

だが、其処へ生き残りを排除するべくパッチの無情な一撃が放たれた。

「ぐばあ！パッチでめえ！」

パッチに対する恨みを叫びながら天のは宙を舞う。

しかし、其処に隙が出来てしまったのだろう。

突如として起き上がったナーノハがパッチの前に立つ。

「ち、まだ生きてやがったのか？」

「当たり前じゃボケエ！さっきのお返しじゃあ！たんまり味わいやがれい！」

下卑た笑みを浮かべながらナーノハがパッチに向かい鼻毛を繰り出す。

だが、それを予測していたのかパッチはヒラリと鼻毛をかわしていく。

「何い！」

「へっ、何時までもめえの鼻毛が無敵だと思ってるんじゃないぞ！」

そう言つてパッチが飛び上がる。
すると其処には何時の間に張つたのかウィングロードらしきレールが敷かれていた。
しかしそれは良く見ると薄いところてんであつた。

「これぞ俺の・・・じゃなかつた！私の魔法（？）の一つ。」とこ
ろてんロード』だ！」
「流石だぜ天の！」

ところてんロードの上に立ちパッチは両腕を組み銃の様な形をとる。

「私は・・・ずっと・・・ずっと強くなりたかつたんです！」

思わせぶりの台詞を吐きながら涙目になって叫ぶ。
勿論その涙は事前に目薬を打つておいた為である。
そしてそれは勿論ナーノハもこんな感じに言う。

「パッチ・・・ねえ、私・・・何か間違つてたかなあ？」

いかにも私は怒っているんですよ。
滅茶苦茶怒っているんですよ。

と言いたげな感じで言うナーノハ。

それに対してパッチと天のの二人は・・・

「間違いだらけじゃねえかあああああ！」
「グバア！」

思いつきり怒り心頭でナーノハを蹴り飛ばす。
どうやら相当鬱憤が溜まっていた模様である。

しかしそれは蹴り飛ばされたナーノ八も同じであった。

「お前ら・・・少し・・・頭冷やそうか？」

かの名台詞を呟きながら指を構える。

その先には天のとパッチが居た。

「クロスファイヤー・・・シュート」

ナーノ八の指から無数の魔弾が放たれる。

そしてそれは一瞬にしてパッチと天のを飲み込んでいく。

「ぎゃあああああああああああああああ！」

「全くもう・・・私を怒らせるところなるんだぞお」

ちやっかり笑顔で言うナーノ八。

だが、その爆煙の中から完全にぶち切れたパッチと天のが現れたのである。

「もう勘弁ならねえ！この場でぶちのめしてやらあ！」

「てめえの主食をとこてんにしてやらあ！」

「ああ上等だあゴリア！てめえら纏めて頭冷やさせてやんよお！」

最早この場は模擬戦どころではなかった。

ナーノ八、パッチ、天のの三名がやりたい放題好き放題に暴れまくっていたのだ。

いかに擬似映像で作られた建物とは言えその建物が滅茶苦茶に破壊されていくのが見える。

その光景は最早模擬戦とは程遠い光景であった。

「もう、止めてよ三人ともお！それじゃ模擬戦じゃなくて只の乱闘だよお！」

「「「ガーーーーーン!!!!」」」

ビュティにそう言われた三人が思いつきりショックを受ける。そしてその場に頂垂れる。

「し、信じられなかった・・・俺達・・・じゃなくて、私達・・・いつの間にか乱闘をしていたなんて」

「そんな・・・原作どおりにやってたつもりだったのに・・・」
「シヨックだわ・・・」

どうやら三人はちゃんと模擬戦をしていたつもりだった様だ。はつきり言って彼らの神経を疑いたくなる発言でもあった。

「哀れだな・・・」

そんな三人を見てソフトンがそう呟いたのであった。相変わらずクールである。

・・・顔以外は。

おまけ 原作第8話 b yポポポバージョン（後書き）

感想、並びに批判などは受け付けております

ただしあんまり酷いのはしないでね

ポーポポからのお願い

作者

「キモイワア！」

第5話 デスマッチ開幕！ハジケリスト 対 マジメリスト（前書き）

前回のあらすじ

遂に、悪の科学者J・S氏は古代ベルカ時代に封印されていた要塞『聖王のゆりかご』を起動させる。

そしてミッドチルダ全域に対し宣戦布告したのである。

それに対し起動六課メンバーは満身創痍の状態。

果たして勝機はあるのか？

ティアナ

「ってこれ原作のあらすじじゃん！本編と全く関係ないでしょうが！」

あれ？台本間違えちゃった。テヘッ

ティアナ

「………こんなので大丈夫なお？」

大丈夫だろう。何しろこれはボーボボとコラボしてるから大抵は大目に見てもらえるだろうし。

ティアナ

「でもやりすぎは駄目でしょうが」

ええ？僕しらない

ティアナ

「一辺、死んで見る？」

チャキツ

ええつと・・・ティアナさんが滅茶苦茶恐ろしいのでそろそろ本編に行きたいと思いま・・・

バキユウウウウウウ

アビヤア!!!

第5話 デスマッチ開幕！ハジケリスト 対 マジメリスト

第5話『デスマッチ開幕！ハジケリスト 対 マジメリスト』

その場に居た一同の前には二人の見知らぬ人間が居た。二人は名前を ライス と スズ と言うらしい。しかもどうやらスバル達の味方の様である。

「あのお、もしかして貴方達もボーボボさんの世界の人ですか？」
恐る恐るティアナが尋ねる。

まあ十中八九そうなのだろうと腹をくくってはいるのだが。

「勿論。僕は首領パッチ先輩に会いに来たのさ」
「私は突然行方不明になった主の捜索に来ました」

ビンゴであった。

どうやら二人ともボーボボの世界の住人のようだ。そして言動からして恐らくライスはハジケリストなのだろうと理解できた。

だってあの首領パッチを先輩呼ばわりするのだから。

「なあんだ、お仲間かあ」

「じゃあ早速飲み会に行こうぜえ」

「打ち上げ打ち上げえ」

「マスコットにコアラをどうぞ」

仲間と分かるや否やスバル達が一気にライス達に絡む。

皆手には一升瓶やスルメやらを持って最早飲み会ムード全快である。しかし忘れてはいないだろうか。

そう、今の状況を。

「おい、貴様ら！私達を忘れてないか？」

かなり忘れられていたのかシグナムが額に青筋を浮かべて叫ぶ。それに一同が振り返る。

「あ、こけしの人だ」

「誰がこけしだあああああああああ！」

スバルの言葉に完全にブチ切れたシグナムが叫ぶ。

それに呼応するかの様になのはとフェイトも前が出る。

「またボーボボさんの世界の人たちなのね？」

「構わないわ！同じハジケリストだって言うなら纏めて倒すだけだよー！」

シグナムに続いてなのは、フェイトの両名も戦う気満々の様である。

「ん？あの人は誰だい？もしかして首領パッチ先輩の弟子とか？」

「断じて違うわあああああ！」

どうやらライスは彼女達の事を完全に忘れてしまっていたようである。

そしてあるうことがあんな未確認生命体の弟子と間違われてしまっ

ただだから溜まったもんじやない。
まあ、こいつらが誰の弟子になると知ったこつちやないのだが。

「とにかく、私達としては貴方達ハジケリストは生かしてはおけないの！」

「だから、例え元教え子だったとしても、容赦はしないよ！」

なのはとフェイトのご両人が揃ってデバイスを構える。
それと同じようにシグナムも同じようにデバイスを構える。
それに対してスバル達は。

「あれ？もう終わった？」

「お前ら話長すぎだよ」

「もうちよつと待つててねえ」

皆で仲良く携帯ゲームで遊んでいる真つ最中であつた。

「緊張感がまるでねええええええええええええ！」

「何やつてるんですか貴方達はあああああああ！」

それを見たティアナとスズが同時に突っ込む。

一応彼女も突っ込み派らしい。

「どつ言つ経緯で敵になったかは知らないけど、毛狩り隊に手を貸すと言うのなら例え山田さんと言えども容赦しませんよお！」

「さつき経緯を説明したじゃない！」

「それから誰が山田さんよお！ちゃんと名前覚えててよねえスバル
！」

話を聞いていなかったうえに思いつきり名前を間違えた事に激しく

怒るのはとフェイトだったりする。

「何だか騒がしい子達だねえ。そんなんじゃお肌が荒れちゃうよお。僕みたいにちゃんと手入れしなきゃ」

と言って鏡に向かってお肌のお手入れをするライス。

しかも何故か女性が寝る時に着るようなネグリジエを身に纏って。

「って、貴方は何してるんですかあああああああ！」

「決まってるじゃない。夜のお肌のお手入れよおん」

「毎日のお肌のお手入れは大事なのよおん」

そう言っつてその隣でヴィータも同じくお肌のお手入れをしていた。ガマ油で。

「ヴィータちゃん・・・それ意味ないんじゃない？」

やんわりと突っ込みを入れるがヴィータには何処吹く風である。

とまあ、そんな感じで激闘が再開されるのであった。

「貴方達、いい加減に目を覚まさない！デイバインバスター！！」

開幕直後、いきなりのなのはの魔砲が向かってきた。

「させません！リフレクト」

しかしそれをスズが前に出てカツと目を見開き、その時に現れた謎の結果により全て弾かれてしまったのである。

「うそ！今のつて一体」

「私は貴方達の様な魔法は使えませんが、多少なりとも超能力が使えます」

「ま、マジでえ！じゃあこのスプーンとか曲げられるのかあ？」

そう言つてヴィータがスズにスプーンを渡す。

スズは言われるがままにそれをグニャリと曲げてしまった。

それを見たヴィータは勿論、スバル、ヴィヴィオ、ライス、ガ王のメンバーは目を輝かせていた。

「つて、食いつくところが違つつつつつつつ！」

其処へ早速ティアナの突っ込みが入る。

「砲撃が駄目なら接近戦で！」

「させるか！」

咄嗟に切りかかろうとしたフェイトの攻撃をヴィータが防いだ。

だが、そのヴィータが持っているのは何時ものアイゼンではなく、ただのネギであった。

「な、何でネギで防げるの？」

「フツ、心頭滅却すればネギもまた超合金になる・・・なんちつて」
「嫌、ありえないから」

ヴィータの言葉に思い切りかぶりを振るフェイト。

確かに心頭滅却したらネギが硬くなる筈がない。

それでは鍋料理を作れないからだろう。

「手伝うぞ！テストロツサ！」

「おっと、君の相手は僕だよお！」

助太刀に行こうとするシグナムに向かいライスが並び立つ。

「おのれ、邪魔するな！」

「受けてみなよ！僕のハジケを！」

お互いに啖呵を切りながら互いにぶつかり合う。

その時間は一瞬であった。

一瞬が終わった時、其処には悠然と立っているシグナムと頭にたんこぶをつけて倒れているライスがいた。

「いてて・・・油断しちゃったよ」

「ふっ、良くかわしたな。だが次は外さん！」

シグナムがそう言ってレヴァンティンの剣先をペロリと舐める。
完全に悪役である。

「くっ、せめてディナータイムになってくれれば・・・」

「何？ディナータイムになるとどうなるんだ？」

「フッ、僕が本領を發揮出来るのはディナータイムになってからのさ。今はまだおやつ時間なんだ。だから僕はまだ弱いのだ」

ライスが言う。

時計を見ると確かに時間は5時30分であった。

ディナータイムまで後30分はある。

「それを聞いたら尚更早く倒さねばな」

そう言ってシグナムがカードリッジを装填して刀身に炎を纏う。

それをライス目掛けて一気に振り下ろしてきた。

「紫電一閃！」

「させるか！」

シグナムがライスに向けて一撃を放とうとした直後であった。

其処へいきなりガ王が飛び込んできたのだ。

それも満面の笑みで。

「あ~~~~れ~~~~、お戯れをおお」

「何だお前はあああああああ！」

いきなり吹き飛んできたのに驚くものの条件反射でレヴァンティンで打ち返してしまった。

「ぎゃああ！マスコットである俺を殴り飛ばすとは！てめえら絶対動物愛護団体に訴えてやるからなああ！」

意味不明な言葉を放ちながら放物線を描きながら吹き飛んでいくガ王。

「今のは・・・」

「どうやら間に合ったみたいだね」

其処にはガ王を投げたであろうスバルがいた。

どうやら主犯はスバルであったようだ。

「君が助けてくれたのかい？」

「まあね、貴方はあのボーボボさんの知り合いみたいだし、それに・

・マジメリストを野放しにしてはられないからね」

そう言つてライスの横にスバルが並び立つ。

「スバル、とうとう貴様は完全にハジケリストに落ちてしまったよ
うだな？」

「勿論！私はあの時ボーボボさんに教えられた時からハジケ道を歩
んできたんです！」

「ならば容赦はせん！その場で切り捨ててくれる！」

今度はスバルに向かい飛び掛る。

「何の！鼻毛真拳奥義！ビューティフルボンバー！！！」

スバルが叫ぶ。

すると何とスバルの鼻から猛烈な勢いで鼻毛が出てきたのだ。
その鼻毛が鞭の様に撓りシグナムを吹き飛ばす。

「グハア！」

吹き飛ばされたシグナムがうめき声を上げて倒れる。

そして、それを見ていたリリカルメンバー（マジメ）は驚く。

「は、鼻毛出したあああああああああ！」

と・・・

「やったよ！私遂に鼻毛真拳を使えるようになったよお！」

「つてうわ！危ないから鼻毛を引っ込めなさい！つてかあんだ、そ
の状態で鼻毛使つな！絶対この作者何時かりりカルファンに殺され
るわよ！」

ティアナが作者の先行きに不安を感じていた。
そりゃそうだろう。

此処までリリカルキャラを壊したのは恐らく作者くらいでしょうからねえ。

「何自慢げに語ってるのよ！」

ティアナが空に向かって叫んでいる。

その光景をとて痛々しい目でヴィヴィオは見ていた。

「良い事、絶対にあんな女になっちゃ駄目よヴィヴィオちゃん」
「うん、分かったよママ」

そしてその隣には主婦姿になったヴィータが買い物袋を片手にヴィヴィオに言う。

「其処のあんた達何話してるんじゃゴラア！」
「「マー！マー！」」

怒り心頭の顔で100tと書かれた巨大なハンマーを振り回して追いかけるティアナからSDキャラになって逃げ回るヴィヴィオとヴィータ。

「シグナム！無駄な事してる場合じゃないよ！早くあのライスを倒さないよ……」

「残念だけど、もう手遅れだよ」

ライスが親指で時計を指差す。

すると其処では既に時計の針が18:00を指差していた。

静かにティアナはそう言うとは故か日本刀を片手にある部屋に行こうとしていた。

其処には日本語でこう書かれていた。

『作者の部屋』

「「「まてまてまてえええええい！！！」」」

ティアナをスバルとヴィータの二人が必死に止める。

チラリと二人がティアナを見るが明らかに殺気で顔が変になつてる。

「落ち着いてティア！流石にそれやったら不味いから！幾らなんでも作者をアポーンしたらこの小説終わるから！」

「スバルの言うとおりだぞ！作者殺したらこの続き誰が書くんだよ！良く考えるティアナ！」

「離せやゴラア！邪魔する奴あ切り倒すぞオラア！」

明らかに口調が変わつてるティアナ。

最早その辺のヤ○ザ辺りに見える。

かなり恐ろしいがそれでも必死にスバルとヴィータは止める。

この小説の明日を守る為に。

一方その頃ライスはと言うと。

「揉みてえ・・・揉みてえよ・・・物凄くおっぱいが揉みてえ・・・」

一人危ない事を口走っていた。

かなり危ない人に見える。

そのせいかなのは達も微妙に近づけないでいた。

するとライスがなのは達に向けてギロリと目を輝かせる。

「ボインちゅわあああん」

と、叫びながら猛烈な勢いで向かって来たのだ。

「「「き、来たあああああああ！！！」「」」

三人が青ざめた顔になって叫ぶ。

しかしこのまま黙ってやられる訳にはいかない為に三人はデバイスを構える。

「ボインちゃんいただきい」

「そうはいかないなお！デバイスバス・・・」

「と、見せかけてパンチラアア！！！！」

なのはが魔砲を放つ寸前にその背後に回り一気にスカートを捲り上げた。

うっすらピンクの大人の柄であった。

「いやあああああああああ！！」

「隙あり！！」

思わずデバイスを手放してしまった。

その隙をつきライスが後ろから・・・

このシーンは放送上の都合上カットさせて頂きます。

「あふう・・・」

気が着けば廃人寸前になったなのはが横たわっていた。

そしてその隣では先ほどより元気になった上に強大なオーラを放つライスがいた。

「まだ足りないなあ・・・もっとポインちゃんのおっぱいを揉み
えよおおお！！！！」

そう叫びながら今度は敵味方関係なく向かって来た。

「させるかあ！この私のドンパッチアイゼンソードを食らえい！
「ペチャパイに用はねええええ！！！！」

向かって来たヴィータを一蹴するかの如く蹴り飛ばす。

その際に「ぐばあ！」と叫んだのはお約束であったのだが。

「やべえよ！マジやべえよ！あのライス滅茶苦茶暴走してるじゃん
！」

「嫌！私達狙われてるよお」
「って、間違いなくガ王君は狙われないと思うけど」

其処にはビキニ姿で胸元を抑えるガ王が居た。

しかし間違いなく・・・と、言うか誰もこんな奴の触りたくないだ
ろう。

「スズさん！あのライスって人を元に戻すにはどうすれば良いんで
すか？」

「って、そんなの私に言われても困るんですけど」

一緒に来たと言う事でティアナに尋ねられるスズ。しかし当然スズ自身どうすれば良いのか分かる筈もなく回答に苦しむ。

「それなら、こんなのがあるけど」

そんな一同にヴィヴィオがある資料を手渡した。其処にはこう書いてあった。

『ライス操縦マニュアル 初級編』

「マニュアルがあるのおお！しかも初級って一体どんななののおおおおおお！」

当然の如くツツコミを入れるティアナ。

まあ何はともあれ資料があるのなら有難い。

ってな訳で一同は資料に目を通す。

その間ライスの相手は必死にフェイトとシグナムが勤めていたが、今は敵なのでどうでも良いので放って置く事にする。

「あつた！このページだ！」

そう言ってヴィータが開いたのは資料の4875ページであった。

「って、これ何ページあるの？」

ティアナがツツコミを入れるもとりあえずその資料に目を通す。

『夕方の6時になりライスが暴走状態になった際の解除方法
おっばいを揉ませる』

「いきなり無理難題だあああああ！！！！」

ティアナが叫ぶ。

まあ確かに無理だよなあ。

色々と問題が多いし。

ま、別に俺は良いけどね

「やっぱりあの作者一辺頭冷やして来るわ」

「だから落ち着いてっつてばティアア」

再び日本刀を片手に作者の部屋に行こうとするティアナを必死に抑えるスバル。

しかし、その時突如として爆発が起こった。

なんだなんだと一同が見ると、其処にはなのは同様廃人寸前になったフェイトとシグナム、それに更に暴走がヒートアップしたライスが居た。

「まだまだ足りない・・・もっと揉みてえ・・・揉みてえよおおお
おおおおおおお！！！！」

「明らかに暴走に拍車が掛かってるっつっつっつっつっつっつっつ！！！！」

暴走にヒートアップしたライスに向かってティアナが叫ぶ。

「って、ちょっと待ってよ！確かおっばい揉ませたら暴走とまるんじゃないの？」

「おつかしいなあ？確かにそう書いてあった筈なんだけどなあ」

ヴィヴィオが肩眉を上げながらそのページを見る。
すると其処にはこう書いてあった。

『おっぱいを揉ませる・・・と、暴走に拍車が掛かってとまらなくなるので絶対に揉ませてはいけませんよ（笑）』

「（笑）じゃないわあああああああああああああ！（怒）」
思いつきりブチ切れ気味にティアナが叫び資料を床に叩きつける。
するとライスの視線がこちらに向く。

「君達もボインだねえ・・・揉ませてえええ」

「「「き、来たあああああああああ！！！！」「」」」
暴走したライスがこちらにやってきた。
正に絶体絶命！

と、思ったその時であった。

「ちよつと待ったあああああああああああああ！！！！」

上空から叫び声が響く。

それと同時に一人の女性が天空から降りてきたのだ。
茶色のポブカットに白の帽子とバリアジャケットを纏った女性であった。

「あ、貴方は・・・」

「そのおっぱい勝負・・・この八神はやても参戦させて貰うでえ！」

第5話 デスマッチ開幕！ハジケリスト 対 マジメリスト（後書き）

次回予告

ティアナ

「最悪な展開になっちゃったじゃない！あのライスさんに続いて八神部隊長まで」

スバル

「このおっぱいバトル。一体勝者は誰に？」

ガ王

「許せん！ティアナさんのおっぱいは僕のもで『ズギュン』グバア！」

ティアナ

「くだらないこと言ってんじゃない！」

スバル

「次回、真説！リリカルポーボ」

『おっぱいバトル頂上決戦！でも関係ないから次行こうか』

ティアナ

「ええ！？無視するの??？」

第6話 おっぱいバトル頂上決戦！でも関係ないから次行こうか (前書き)

前回のあらすじ

勇者一向は遂に大魔王ナーノハの元へと辿り着いた。

だが、ナーノハの力は余りにも凄まじく、勇者達は絶体絶命のピンチに立たされていたのであった。

ティアナ

「この作者・・・マジメにあらすじ書く気ないでしょ？」

その通り！ってなわけで今回も始まります！

第6話 おっぱいバトル頂上決戦！でも関係ないから次行こうか

第6話 おっぱいバトル頂上決戦！でも関係ないから

次行こうか

突如として暴走したライスの元へ現れたのは何と元起動六課部隊長の八神はやて氏であった。

お互いにおっぱいを欲する二人の猛者。

その二人の激しい戦いが勃発する・・・

訳でもなく、とりあえず新しい仲間の介入を喜ぶのであった。

「祝！八神はやてさん参入おめでとう御座います！」

と、こんな感じにはやての参入を祝うために皆でテーブルを囲んで料理をつついていた。

「って、またやってるよこのお馬鹿達は」

ハジケリスト達の楽しげな光景を見て毎度の如くティアナが呆れた顔で見っていた。

最早突っ込む気も失せたようである。

「あれ？そう言えばスズさんは？」

ふと、おかしな事に気づく。

それは普段ならティアナの隣でツツコミ担当になる筈のスズが居ないのである。

そして、不安の眼差しでテーブルの方を見る。

すると、其処ではスズがナイフとフォークを手にシーラカンスをがつついていたのであった。

「す……スズさん……貴方まで」

今まで彼女だけがまともかと思っていたのに彼女もまたハジケメンバーであった事に激しく落胆するティアナであった。

そうして、ふと一同が食べている料理を見た。

其処には沢山の料理の他に一皿だけ巨大な皿が置かれており、その上には奇妙な料理が置かれていた。

何て言うか、オレンジ色でヒトデを思わせる概観をしており、その上手足が生えている奇妙な……

「って、貴方首領パッチじゃない！一体何でこんな所に居るのよ！」

「ようお前ら。久しぶりだなあ」

ひよつこりと皿の上で起き上がった首領パッチが皆に手を振る。

それよりティアナはある事に突っ込みたい。

そもそも、何故皿の上に乗っていたのかと言う事に……

「ふつ、流石はこの俺が認めた唯一のライバル。よく俺の変装を見破ったな」

「あれが変装だったの？只の性質の悪い嫌がらせにしか見えなかったわよ」

「馬鹿な！俺の秘奥義『ミートスパゲツティ変装術』は完璧だった筈！」

「あれがミートスパゲツティだって言うなら私はそれを二度と食べないわよ！」

自信を持ってティアナは断言した。

しかし、どうやら首領パッチの正体に気づいているのはどうやらティアナだけのようだ。

その証拠に他のメンバーは次々と首領パッチに牙を突き立てて齧っていく。

「フッフ、だが今の所俺の変装を見破っているのは貴様のみ。さあどうする？他に味方はいないぜ」

「嫌、貴方こそ早く変装解いた方が良いんじゃないや・・・滅茶苦茶食べられてるけど」

今の首領パッチはさながら大量のゾンビに囲まれて揉みくちやにされながら齧られていると言った感じである。

「フハハ！さあ、今から始まる恐怖に泣き叫べ！そして己の無力さを呪うが良い・・・って、俺食われてるじゃねえかああああああああ！」

「今頃気づいたんかいいいいいい！」

気づくのが遅すぎであった。

とりあえずティアナは急ぎ皆に事情を説明して食事を止めさせる。

「き、貴様・・・パジータ！」

「フツ、喜べウサロットよ、お前の様な下級戦士がこの俺の様な超エリートに遊んで貰えるんだからなあ」

と、まあ名前で分かる通り目の前では何処その戦闘民族が着てそんな戦闘服を身に纏いニヤリとしている首領パッチにオレンジ色の胸着姿のヴィータがマジ顔で睨みあっていた。

「・・・何やってるの？」

その光景を見てティアナがふと呟いた。

しかしそんなティアナを他所にパジータとウサロットは互いにぶつかりあう。

激しく拳と蹴りを交差しあいそれが何十回、何百回と繰り返されていく。

「どうした？ウサロット！お前の力はそんな者か！あの時スッパを倒した時の様な力を出してみる！」

「いいだろう！オラの力を見せてやる！」

ヴィータは何を思い立ったのか力を溜めて、それを開放した。

「これがオラの『超サ○ヤ人』だあ！」

「ええええ！ちよっ、おい待てコラ！順番違うだろう！」

「え？あれ？そうだけ」

「そうだろう！お前ちゃんと原作読んだか？」

そう言っつて首領パッチはヴィータに某メガヒット漫画を渡す。

それをヴィータはパラパラと捲る。

そしてギョツとなる。

「あ、確かにそうだ！此処だとオラ超サ○ヤ人じゃなくて界○拳使うんだ」

「そうだろうが！何とち狂った事言っただよ」
「アハハ、悪い悪い。んじゃ台本どおりにやるか」

とまあ、ちよつと悪ふざけがあつた物の台本どおり元の展開に戻る。

「フュージョン！ハッ！」

ヴィータと首領パッチが互いに叫びあい奇妙なポーズを取る。
すると二人を閃光が包み込み、やがて其処には一つになった物があらわれる。

それは、体はシグナム並の魅惑のボディであつた……が！
顔は首領パッチそのままであつた。

「フュージョン完了！私の名前はシグパッチ！」

「完全に失敗してらうつうつうつうつうつうつうつ！！！」

合体した首領パッチを見てティアナが思い切り叫ぶ。
しかも、いつの間にか隣にはヴィータが居た上に、なのは達の所に本来居た筈のシグナムが居なくなつていた。

「ヴい、ヴィータ副隊長……まさか」

「おう！物は試しにっんでシグナムを入れてみた」

したり顔でとんでもない事を言うヴィータ。

どうやらハジケリストとマジメリストは俗に言う『混ぜるな危険』
と言つらしい。

その証拠にあんまり強くなさそう。

「うおっ！こりゃ凄い魅惑のボディじゃねえか！これならこの小説
のヒロインになれるのも夢じゃねえぜ！」

「嫌、無理だと思っけど」

流石に体が魅惑でも顔があれば流石に無理だろうとティアナは思う。

「ホッソホッソホ、随分とやってくれましたねえ貴方達。まさかこの私を此処までコケにするとは」

「!!!!」

シグパッチが上空を見上げる。

すると其処には白い全身タイツを身に纏い黒い口紅っぽいのを口に塗り、太い尻尾を生やした宇宙の帝王が立っていた。

「貴様は！ハヤーザ！」

「絶対に許さんぞ貴様ら！ジワジワと鬨り殺しにしてくれるわ！」

「って、何言ってるんですかはやて部隊長！」

「其処に居たかクククク」

「誰がククククじゃあ！」

シグパッチの言葉に思い切り怒り心頭で返す。

「受けて見るお！合体してパワーアップした俺・・・じゃなかった！私の力をお！」

シグパッチがそのままハヤーザに向かっていく。

しかしそのシグパッチをハヤーザは片手で一蹴する。

「グバア！」

猛烈な勢いで地面に激突した衝撃で合体が解けてしまい其処には倒

れている首領パッチとシグナムが居た。
よろりと首領パッチは起き上がり。

「全然弱いじゃねえかあ！」

「ぐはっ！って私のせいかいい！」

いきなりシグナムを蹴り飛ばして怒る首領パッチ。
完全に責任転嫁である。

「ホッソホッソホ！猿共の力など所詮この程度。宇宙の帝王であるこの私の敵ではないのだよ」

「ちつくしょう・・・こんな時にドンパッチソードさえあれば！」

首領パッチが悔しそうに呟く。

すると其処へネギを片手に駆けてくるヴィヴィオが居た。

「お父さん！これを使ってえ！」

「馬鹿！来るな○飯」

「今度は○飯ンンン！！！」

またしてもそのネタを使うんかいいい！っとティアナはツッコミを入れる。

しかしそんな○飯に向かいハヤーザは無情にも指先から閃光を放つ。

「○飯ンンンン！」

「うわああああああああ！」

余りの速さに回避がとて出来ない。

そう思った○飯であったが、其処へ突如スバルが前に立ちその閃光からかばったのだ。

「こ、今度はスバル・・・」

「す、スツコロさん！」

「何スツコロって・・・滅茶苦茶ごろ悪いけど」

確かに語呂合わせは最悪である。

しかしそんな事などお構いなしに二人は演技を続ける。

「ちっ・・・お前ら親子のせいで情が移っちゃったぜ」

「スツコロさん・・・どうして？」

「良いか、○飯・・・怒るんだ・・・お前の本当の怒りの力を引き出せ」

「す・・・スツコロさん」

(え？何？今度はセ○編に突入？)

ハジケリスト達が熱演してる中、ティアナは話題についていけず困惑している。

しかもいつの間にか自分はク○ン役にされてる始末である。

「許さないぞ・・・よくも・・・よくもおおおおおお！！！」

怒りのパワーが爆発したヴィヴィオ・・・もとい○飯が怒りのパワーアップを果たす。

「な、ぬぁにいいー！」

ハヤーザの隣ではセ○のコスプレをしたライスが居た。

何とも盛大なコラボレーションである。

そんな二人に向かい○飯が突っ込んでいく。

「ハジケ奥義！『その昔良くやってたパイ投げええ』」

怒りの形相で○飯はその昔コントでやってた巨大なパイを投げつける。

それを二人して顔面に食らい吹っ飛んでいく。

「ぐばあっ！」

「な、何と言うパワーなんだあ！」

意味不明な言葉を叫びながら吹き飛んでいく二人。
はつきり言っつてついていけない。

「な、何と言う激しい戦いなんでしょう・・・冷や汗が絶えない・・・」

「ねえスズさん・・・それ本心で言ってます？」

冷や汗をかくスズに甚だ疑問を感じるティアナであった。

とまあ、そんな感じで至極どうでも良い戦いが展開されているのであった。

だが、其処でふとある事に気づいた。

それは・・・

「あれ？そう言えばさっきの三人の人たち何処に居るんですか？」

「そう言えば・・・なのはさん達は一体何処へ・・・」

辺りを見回せば敵であった筈なのは、フェイト、シグナムの三名の姿が忽然と居なくなっていたのである。

「ねえあんた達い。なのはさん達知らない？」

ティアナが目の前でふざけまくるハジケリスト達に言う。
だが、其処にはオレンジ色の胴着を身に纏い片目に古めかしい傷をつけた長い髪の青年のコスプレをして全身スタボロになって倒れているハジケリスト達の姿が映っていた。

「今度は全員ヤ○チャ!!!」

それを見たティアナがこれまた盛大に叫んだと言う。

「どうしても良いけど今回俺の出番がねえじゃねえかあああああああああああああ！」

それとは全く関係ないがガ王が盛大に叫んでいたが、其処は逢えてスルーすると言う特技を覚えるティアナであった。

その頃、此処はネオ・マルハーゲ帝国のとある部屋。
その部屋には多くのおもちゃやあやし道具などが沢山置かれていた。
まるで赤ん坊専用の部屋である。

そしてその中に一人の大男が寝転がっていた。

「バブウ様！例の三人の処遇ですが・・・いかが致しましょう？」
「仕方ない奴等でちゅ。あいつら僕の命令を無視して勝手な事をし

「また。お仕置きをする必要があるでちゅ」

大男が少し微妙な言葉遣いで答える。

その大男の周囲から終始何かを締め上げる音が響いた。

だが、部下は逢えて其処はスルーして一礼して去る。

「全く、ちみ達にも困った物でちゅねえ。ちみ達は僕のおもちやな
んでちゅよお。おもちやが勝手に動き回ったら駄目なんでちゅよお
！」

「にゅあああああああああ！」

「きゃあああああああああ！」

「ぐわあああああああああ！」

其処には先ほどスバル達を襲撃したなのは、フェイト、シグナムの
三名がバブウによりきついベアハッグと言うお仕置きを受けている
光景であった。

しかもかなりのパワーで。

とまあ、そんな事が起こっているのだが至極どうでも良いので話題
を変える事にする。

「ねえ、スバル。これから何処に行くつもりなの？」

その頃、毛狩り隊Bブロック基地まで制圧したスバル達はある者の
下へと向かっていた。

「そう言えばおやびんはずっと何処に行ってたんですか？」

「ああ、そう言えば色んな所に行ってたぜ。何か神秘の都って言う

所に行つたし、後はお前そっくりの女と確か・・・イングなんとか
つて奴の所にも行つてたなあ」

「へえ、流石おやびん！凄いなあ」

「つて、あんた物凄い過去に行つてるじゃない！まさか過去の改ざ
んとかしてないわよねえ！」

物凄い形相で首領パッチを睨むティアナ。
気のせいか首領パッチの頬が赤く染まる。

「ちよつと、何よ！そんな目で見ないでよ！思わずドキツとしちゃ
つたじゃない！」

「知らないわよ！とにかく答えなさいよ！」

「ち、わあつたよ」

ぶつきらぼうに首領パッチは答える。

しかし説明するのが面倒なのでハイライトでどうぞ。

まず首領パッチは神秘の都『アルハザード』に来ていた。

しかもあるう事かその都の住人に神と崇められていたのだ。

だが、ふと暇つぶしに押したボタンがアルハザード自爆ボタンであ
りそれが原因でアルハザードは滅んでしまったのである。

その後は古代ベルカ時代に居たオリヴィエとイングヴァルトの居た
時代に来ていた。

其処で首領パッチはオリヴィエと激しいハジケ勝負を展開する。

だが、イングヴァルトは終始ツツコミっぱなしであったが。

しかし、激化する戦いの中で遂に首領パッチは聖王のゆりかごを起
動させる。

タコ糸で縛りそのまま上空に舞い上がらせて上空から大量のちくわ
を振舞つたのである。

そのちくわが原因で古代ベルカ時代は古代ベルカハジケ時代と改ざ

んされて激しいハジケた戦いが展開される子となる。
こうして首領パッチが聖王となったのであった。

「つてな感じなんだよ」

「思いつきり歴史を改ざんしてるじゃないのよこのお馬鹿ああああああああああああああああああ！！！」

話を聞き終わった途端怒りのティアナのハリセンブレードが炸裂した。

「おおい、皆着いたよお」

そんな一同を他所にスバルが手を振る。
其処は古びた一軒家であった。

「随分古臭い建物やなあ？」

「本当に此処に例の人物が居るのでしょうか？」

余りの古さにはやてとスズが不安になる。

「まあ、入ってみれば分かるよ・・・こんちわあ。親父い、居るか
い？」

扉を開けるスバル。

すると其処には一人の少女がスルメイカと一升瓶を手にしている光景であった。

しかも一升瓶には達筆で『女殺し』と書かれていた。
要するに酒である。

「おう、よう来たなあ。待ってたよお」

「ルーテシアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！あんた何してんのよお！」

其処に居たのはかつて知り合った少女ルーテシアであった。どうやら彼女はあのあと情報屋として成功したらしいのだがその影響でかこんな事になっているらしい。

「おいおい、本当にこいつが情報屋なのか？信用できないぜえ」

明らかに信用が薄いなあと首領パッチが呟く。すると其処へルーテシアがニヤリと微笑む。

「いいよお。それならワシの実力を見したるわあ」

そう言つてルーテシアが手元にあつたりモコンを押す。すると上空から巨大なモニターがゆっくりと降りてきて其処から映像が映し出される。

それはとある日の事であつた。

『ご免なあ。給金は今の所これ位しか払えんのやあ』

それは六課の給料日。

だが、一同に支給されが額が何時もよりかなり少ないのだ。しかしそれで文句を言う者などは居ない。そう、彼のお陰である。

『ま、しょうがねえよ。此処んとこ平和続きだからって事で許してやれよ』

『そうだね。首領パッチ君の言うとおりだね』

皆が首領パッチの言葉に頷く。

しかし、その夜・・・

部隊長室の部屋をあさり大金を手にする首領パッチ

『ビンゴ！・・・んじゃ、今回も貰って行くぜえ』

したり顔で大金を片手に首領パッチが向かった先。
それは人気ナンバーワンのホストクラブであった。

『オ~~~~ッホッホッホ！この店で一番高い酒を持ってきなさい！
私を誰だと思ってるのお！私は女王なのよお！』

いかにもご満悦な感じで遊びまくる首領パッチ。

給料が減りまくってる原因は首領パッチであった。

すると、その背後には完全にブチ切れオーラ満開の六課メンバーが居た。

「まさか、このごろ給料が少ないと思ったのは・・・全部あなたのせいだったのね」

「笑えんなあ」

「覚悟は出来とるやろうなあ？」

「てめえのせいで、てめえのせいでウサ男は辛い日々を送ってるんだぞ！」

「ヒイヒイヒイヒイヒイヒイヒイヒイ！」

完全に切れた六課メンバーの手により首領パッチは魔女焼きの刑に処され暫く萌え続けたのであった。

・・・間違えた！燃え続けただ！

「全く、あいつとんでもない奴だなあ」

「人の事言えるのかい？コアラ君」

ニヤリと微笑みながらルーテシアがボタンを押す。
すると続々とモニターが振ってきて映像が映る。

『ガ王さん！魔法少女まどか まぎかのパチモングッズの製造完了
しました！』

『よし、それをそのままの名前に改名して売り出せ！多少違っても
馬鹿共は分かんねえよ！ちよっぴりエッチに作っておけ！そうすり
や馬鹿共は食いつく』

『それではこちらのなのは（無印バージョン）はどうしましょう？』
『色違いにして複数売り出せ！来年までに10億捌くぞ！』

『ガ王さん！最近事務所が動き出したようです』

『スイスに回してマネーロンタリングして来い！残りの金は全部株
券に換える！』

『はい！』

『ヒツヒツヒ、世の中は馬鹿とエロス共しか居ないお陰でちよろい
商売だぜ。甘い汁吸いまくってやるよお。ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤ
！』

その映像の中には下卑た笑みを浮かべて札束を数えて葉巻をくわえ
ているガ王が居た。

それを見た一堂が皆揃って「うわあ」ってな顔をしていた。

だが、そのガ王はと言うと。

「僕、何か間違った事しましたか？」

開き直っていた。

「因みに、この映像はクラナガン全土に渡って放映されています」

「ジーザス!!!」

スバルの解説を聞いたガ王が物凄く頭を抑えていた。それからもかなり痛い映像が映し出されていた。

ポーボボのコスプレをして鼻毛を出しまくりながらポーボボの前期OPを熱唱するスバル。

ウサ男とは別の人形と一緒にスヤスヤと眠るヴィータ。スクール水着にシャンプーハットを被って眠るライス。マグロの丸焼きを食べまくるスズ。

ダンディーな顔立ちになりスタイリッシュな銃撃戦を展開するヴィオ。

鳥人間コンテストに入場したは良いが最下位になったはやて。

等、とても痛々しい映像ばかりであった。

そして、それを見せられた一同が岩の様に固まってしまっ。

「うわぁ、どれも痛いなぁ」

それを見たティアナが思わずそう呟いた。

「親父、先ほどの無礼は謝ります。それよりどうか!」

「知つとるよ。あの三人の行方を知りたいんじゃないやろあ?それなら既にリサーチ済みやで」

そう言ってルーテシアが二枚の写真を見せる。

其処には三人が片膝をついて挨拶をこう姿と巨大な建物が映ってい

た。

「この建物は最近立てられた聖デミグラス学園じゃな。んでこの三人が挨拶をしてる奴じゃが・・・残念じゃがワシでも其処までは入手できなかったわい」

「上等です！居場所さえ分かればこっちの物です！何としてもあの人たちを見つけてしかるべき処置を施します！」

「いや、普通に連れ戻そうよお！」

明らかにお仕置きするつもりメンバーにしっかりとツツコミを入れるティアナなのであった。

こうして、一同は一路聖デミグラス学園へ向かうのであった。

余談だが、あの後ガ王は脱税容疑により逮捕されたのは記憶に新しい事である。

第6話 おっぱいバトル頂上決戦！でも関係ないから次行こうか (後書き)

次回予告

スバル

「今回は学園に潜入だあ！」

首領パツチ

「潜入といったらやっぱりリーゼントに特攻服は欠かせないよなあ」

ティアナ

「怪しさ100パーセントだよ」

ガ王

「その通りだ！此処は『凶』と書かれたマスクをつけて木刀を片手に持つのがセオリーなんだよ」

ティアナ

「そんな古い学制いまだき居ないよ！」

スバル

「皆駄目だなあ。此処は勿論民族衣装で攻めるのが一番でしょ」

ティアナ

「おのれが一番路線からはずれ取るわああああああ！」

スズ

「次回、真説リリカルボーボ」

『学園に侵入大作戦！喧嘩上等じゃあゴリア！』

ティアナ

「潜入する気……ないでしょ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0718w/>

真説！リリカルポーポポ 激闘！ハジケ大決戦！

2011年10月28日09時11分発行